

十億人のイヴ

A Billion Eves

ロバート・リード
Robert Reed

Nippon2007 ヒューゴー賞候補作品 ノヴェラ部門
Nippon 2007 Hugo Nominees Best Novella

高里ひろ+増田まもる訳

本作品は原作者の希望により、第 65 回世界 SF 大会／第 46 回日本 SF 大会

Nippon2007 参加者向けに翻訳・公開されているものです。

無断複製・転載を禁止します。

Nippon2007 実行委員会

ロバート・リードはこの物語についてつぎのように語っている。「二十代半ばで書いた物語を大幅に手直したものです。もとの作品から残ったのは、大学の女子寮のフラッシュバックの場面だけです……視点と全体的なトーンを変え、なんとか二十年間の人生経験で得た知恵を加味できたのではないかと思います」

1

カーラの両親は儉約家で、しかも実際的能力のない人たちだった。お金を使うこと、とりわけ少しでも贅沢や道楽じみたものに使うことを嫌うのだが、それと同時に、理想が高すぎて達成可能な目標を定めることができないという欠点もあった。

ある春の日の夕方、父がいった。「今年の夏は車で遠くに行こう」

「どこへ？」母が聞きとがめるようにいった。

「山だよ。いままで何千回もそうしようといっていたように」

「でもそんなゆとりはあるの？」

「小銭まで数えて、募金運動がこの調子でいけば、なんとかなるだろう」ファーストデイのお祝いはついこのあいだ終わったばかりだった。達成可能な目標が自慢の両親の教会は、今年は良好な年を迎えていた。「自然の味わいだ」父は食卓で叫んだ。「楽しそうじゃないか？」

ほかの家族だったら、それはすばらしい休日のはじまりだったかもしれない。しかしカーラにはそうは思えなかった。予想どおり、行きたい場所のリストをつくりはじめるやいなや、ごたごたがはじまった。兄のサンダーは、つねにグランドと名づけられるキャニオンに一日か二日は行きたいといった。意外なことに、父は太母洋の近くの眠るように穏やかな氷に覆われた火山が好きだと打ち明けた。せきたてられて、カーラはモルモン海の黒い砂浜を歩いてみたいといった。母は、景色にはとくに興味はないけど——その口調はいかにも偉そうに聞こえた——西部には五人の姉妹が散らばっているから、西部を横切っていくなら、せめて挨拶だけでもいいから、立ち寄らないわけにはいかないといった。

長い紙はたちまち目的地で埋めつくされ、十一歳の少女でも、結果がどうなるかは予想がついた。旅行は車で移動するだけで終わってしまうだろう。さらに悪いことに、「他人の料理にお金を払うことはないわ。食べ物を持っていきましょう」と母はいった。それはつまり、どこに行くにも大きなクーラーボックスを引きずって歩き、毎度毎度おいしくないサンドイッチを食べ、朝起きたらまず必然的に腐ってしまう食べ物を捨てて、新しい氷と安い食料品の買い出しに行くことを意味した。

儉約ぶりで妻に負けまいと、「それにももちろん、キャンプするんだぞ」と父がいった。でもどうやって？ 道具もないのに。「そうだ、寝袋ならあるぞ」心配する娘に、父はい

った。「テントは教会の友人に借りよう。まかせておきなさい。心配いらない。すばらしい旅になるぞ！ 毎日好きなところまで車を走らせて、日が暮れたらそこで泊まるんだ。テントを張るにはお金がかからないからな」

そんな旅行は不可能だし、うまくいくはずがないとカーラは思った。あまりに長い距離を走らなければならないし、あまりに多くの希望をかなえようとしているからだ。どんなにうまくいったとしても、きっとだれも満足しないだろう。

「いつになったら学ぶのかしら」カーラはつぶやいた。

「なにかいったかい、カーラ？」

「なんでもないわ、父さん」カーラはかすかに頭をさげた。「なんでも」

それでもときには、とりわけもっとも苦しんでいる者に、幸運が微笑むこともある。山岳地帯までまだ二、三百マイルもあるところで、ラジエーターホースが破裂したのである。突然、七月の暑い空気にシューシューという水蒸気と不凍液の甘い匂いがたちこめた。父は神さまとファーストファザーにひとしきり悪態をついてから、車を路肩に停めた。「中にいなさい」そう言って父は車を降りると、長いボンネットをギギーッと開け、大きく息を吸ってから、もうもうとたちこめる蒸気に飛びこんでいった。

サンダーは手伝いたがった。実際手伝わせてと母に懇願した。しかし母は警告の視線を向けた。「いけません、ヤングファザー。中にいなさい。外は危ないわ」

「そんなことないよ」カーラの兄は反論した。

だがそのとき、母のことばを証明するかのように、父が悲鳴をあげた。父は二回悲鳴をあげた。まず熱湯で右手を火傷し、不幸のバランスをとろうとするかのように、盲目的に左手を突き出して、過熱したエンジンブロックにちょっと触れてしまったのだ。

「だいじょうぶ？」母が声をかけた。

父は乱暴にボンネットを閉め、フロントガラス越しにこちらをのぞきこんだ。カメの卵のように青白い顔色をして、痛みを顔に歪めていた。

「ボンネットを開けておかないと」サンダーが大声でいった。「少しでいいから！」

「なぜだ？」火傷をした父がたずねた。

「風通しを良くしてエンジンを冷やすんだよ」兄はカーラと二歳も離れていなかったが、両親に似ず、機械とか、そのほかの生活に必要な実的な才能に恵まれていた。彼は妹にからだを寄せていった。「運がよければ、ホースと不凍液だけ交換すればすむよ」

でもわたしたちは運がいい人間じゃないわ、とカーラは考えていた。

一家は金曜日の安息日に出発した。ということは、ほとんどの店が閉まっていることを意味した。しかしカーラの不安をよそに、この日は特別な日だった。父が故障した車をさっきの交差点まで走らせると、めずらしくついていて、営業中のちいさなガソリンスタンド兼修理工場が見つかったのだ。がっしりとした老紳士が彼らをコーンブレッド

でもてなし、車はすぐに直してやろうと伝えてくれた。父には薬用軟膏をくれて、母と娘には、裏に新しい婦人部屋があると教えてくれた。高速道路から見えないようになっているという。しかし隠れなければならない理由はなかった。母は人生の後半に子どもをつくり、ここ数年でかなり太ってしまっていた。カーラはまだちいさな女の子の体つきで、もう少しすればかわいらしい顔になるだろうが、さしあたりは幼さと不格好な鋭い骨にカモフラージュされていた。

母と娘が待合室でコーンブレッドを食べているあいだに、父と息子は修理工場に立って熱く濡れたエンジンをみつめていた。

安息日だというのに交通量は多かった——貨物トラックからちいさな乗用車まで、さまざまな車が走っていた。旅をする男たちや、わずかな女たちが、燃料や甘い飲み物を買っていった。女たちは例外なく手早く支払を済ませて急いで出て行った。ほとんどは母と同じ年ごろだったが、用心するにこしたことはない。男性客たちは長居して、どうやら修理工は客とのつきあいが楽しみなようで、ありとあらゆる話題についておしゃべりしていた。天候は欠かせない話題だった。それにスポーツチームとつまらない地元のニュース。陰気で小柄なトラック運転手が世界はすでに人が多すぎて混雑して好みに合わないという、老紳士はまったく同感だと答えた。ところがつぎの客は陽気なセールスマンで、その人の前では、修理工は思わず賢明な政府と人口の急増をほめたたえてしまうのだった。

カーラはその一貫性の欠如を母に話した。

母は肩をすくめて説明した。「あの人は商売人なのよ、カーラ。その場に合わせてことばを使いわけているのよ」

カーラはやせた顔に疑わしそうな表情を浮かべた。彼女は女学校でいちばん頭がいい生徒だった。でもまじめでほとんどユーモアのセンスがなく、たぶんそのせいで、いつも自分の正しさに自信をもちすぎている。どんな場合でも正しい答えはひとつだけ、いふべきことばもひとつだけ、善良な人間は敵に対しても自分の考えを変えるべきではないと思っていた。「わたしはことばを使いわけたりしないわ」カーラは誓った。「どんなときでも」

「もちろんそうでしょうね」母はそう言って、なにがおかしいのか、くすくす笑った。

カーラは、少なくともいまだけは、それを聞き流すことにした。店のラジオから流れてくる賛美歌に耳を傾け、好きな曲に合わせて鼻歌をうたった。お気に入りの野外観察図鑑を見て来るべき自然に備えた。周囲の景色は自然からかけ離れていた——平坦で見通しが良く、どちらを向いても、緑のトウモロコシ畑が水平線の彼方まで広がっていた。数本のビャクシンが、風よけのためにハイウェイのわきに植えられていた。ときどきカーラは椅子から立ち上がって、せまい待合室を歩きまわった。店の金庫には鍵がかかっている、プラスチックの長い棚の上にねじ留めされていた。埃っぽい隅には、古い書類

や支払い済みの手形が積まれていた。婦人部屋につづく金属の扉は、いまは開いていたが、真新しい鋼鉄製のボルトで鍵がかかるようになっていた。扉の横に大きな厚紙が貼り付けられて、若い娘の写真におおわれていた。数十人の少女たちがカメラに向かって笑いかけていた。カーラは椅子にもどると、女の子の写真がたくさんあるわといった。

母はうなずいただけで、なにもいわなかった。

もう一度部屋の中を歩きまわってから、カーラはたずねた。「あの子たちはみんな連れていかれたの？」

「そんなことないわ」母はすぐに答えた。まるでその質問を予想していたみたいだった。

「たぶんほとんどは家出でしょう。家庭環境が悪かったり、よくない友だちがいたり、いまごろはどこかの路上で生活しているわ。行方がわからないだけよ」

カーラはその答えについて考えた。行方がわからないだけ？ でもそれはこの世界から連れていかれるよりひどいことだわ。路上で生活して、家族も友だちもないなんて——おそろしい運命だわ。

娘の考えを察して、母はいった。「いずれにしても、おまえがそんな生活をすることはないわよ」

もちろんそんな生活はしないわ。カーラもそう思った。

サンダーがふいに現れ、つづいて父もやってきた。ふたりは口をそろえて、とても悪い知らせを告げた。彼らの古い車はあちこち修理が必要だったのだ。重要なガasketは壊れそうだし、トランスミッションはひどく調子がおかしかった。修理には時間と、手持ちの金のほとんどが必要だったが、それは大問題だった。いや、ひょっとしたらそれほど問題ではないかもしれない。父はすでにその問題についてじゅうぶん考えていた。最寄りの山岳地帯はここから三時間もかからない。合理的に考えれば答えはひとつしかなかった。一か所だけでキャンプすることにしたらどうだろうと父はいった。ベースキャンプみたいなものだ。今年はグランドキャニオンにもモルモン海にも行けないし、まして遠くに住む妹を訪ねることもできない。しかし十日間高地でのんびり過ごし、いくらかお金を残して家に帰れるぞ——。

母は夫におじぎをしていった。「あなたが決めたとおりにするわ」

「それなら決まりだな」そう言って、父はカウンターから地図を借りてきた。「テントを張るのいい場所を見つけよう。いいかな？」

意を決したように、父と息子はまた出て行った。しかし母は落ち着かない様子で、椅子に前かがみになった——既婚婦人らしい服を着たぼってり太った女。いままでになく白髪が目立ち、その表情にこれとって変化はなかったが、丸っこい指が動いていた。

カーラは母になにを考えているのかたずねたかった。姉や妹に会えなくてがっかりしたの？ すまないと思っているの？ もちろんそうでなければ、ただ同然で買って手入れひとつしていなかった車に、ほかに悪いところがあるのではないかと考えていたのか

もしれない。

突然、キキーンというブレーキの音が静寂を破った。ひとりの旅行者がハイウェイをおりて、いちばん遠いガソリンポンプのそばに停車したのである。カーラは水色の長い車体を見て、スクールバスみたいだと思った。しかし学校の名前は紙やすりで消されており、前方の窓は鉄格子におおわれ、後方の窓にはベニヤ板が張られていた。カーラはこのバスの正体が完全にわかった。必要な物資は後部に詰めこまれているのだ。ほかにもたくさんの荷物が屋根の上に積まれていた——大きな袋が前から後ろまでずらっと並び、ロープとゴムバンドでしっかり縛りつけられて、雨に濡れないように黄ばんだ厚手のビニールで覆われていた。

ひとりの男が真昼の日差しの中に出てきた。若くはないが、年寄りでもなかった。エメラルドグリーンシャツと黒い衿で、チャーチ・オブ・エデンのメンバーだということがわかった。二丁の拳銃がベルトに浅く差しこまれていた。男はハンサムで強そうだった。それにカーラにははっきり定義できなかつたが、重要な事柄についていかにも有能そうだった。男はハイウェイを端から端まで見渡してから、開いている修理工場をじっとみつめた。それからキーチェーンを出してバスのドアに鍵をかけ、大きな燃料タンクに給油ノズルを差し込んで、一滴でも多く入れようとした。

一家の車を直していた修理工はまた手を休めた。しかしほかの客のときとはちがって、長いレンチを持ったまま、給油ポンプのほうに歩いていった。いつもの愛想の良い顔は消え去り、無愛想とまではいわないまでも、警戒の表情を浮かべており、ひよっとしたら非難の色もあったかもしれない。

「来なくていい」若い紳士は大声でいった。「こっちから払いにいく」

「その必要は——」

「いや、そうする。ともかく近づかないでくれ」

修理工は立ちどまり、すこし間をおいてから、きびすを返して戻ってきた。

若い男は手のひらでバスのドアを一度だけ叩いて叫んだ。「二分だ」

そのときには全員が待合室に集まっていた。父は婦人部屋にちらっと目を向けたが、必要ないと判断したようだった。父はすわっている母のうしろに立った。火傷した手には包帯が巻かれていた。サンダーはカーラのそばにいた。修理工はカウンターのうしろに立ち、母と娘に「心配いらぬ」といいながら、食器棚を開けてなにか重そうなものを取り出すと両手で構えた。

「銃だった」あとになって、サンダーは妹にいった。「ちらっと見えたんだ。小型のスプラッター銃だ。弾がこめられていつでも発射できるようになっていたよ」

「でもどうして？」カーラはたずねた。

「緑色のシャツの男は、この世界を出て行くところだった。あいつが行くところには自動車修理工場なんてない。道具もないし法律もない。だからもしあいつが工具箱を盗も

うとしたら、わかるだろう？」

そうかもしれない。でも彼はこちらを恐れているようにふるまっていた。まるでだれかが彼の大切なものを盗むんじゃないかと心配しているみたいに。男は用心深く部屋に入ってくると、「弟が車に乗っているんだ」といった。

「そいつはよかった」と修理工がいった。

「いくらだい？」

「二十と三分の一」

「釣りはいらぬ」そういって、男は札を二枚渡した。緑色のシャツの男は微笑を浮かべようとしたが、ひきつった作り笑いにしかならなかった。「なあ、おやじさん、きょうだれがおれのことをたずねたかい？」

「たとえばどんな？」

「さもなければ、おれのバスに似た車のことを話していたとか？ 見知らぬ紳士が立ち寄って、おれたちを見なかったかとたずねたりとか……？」

修理工は首を振った。疲れた顔に微笑みらしいものはなかった。「いいや。あんたやあんたのバスについてたずねたものはいないよ」

「それならいいんだ」緑色のシャツの男は札束からもっと金を出して、プラスチックのカウンターに置いた。「金髪の若いやつなんだが。もしそいつがここに立ち寄ってたずねたら……たのみがある。なにもいわないでくれ。知っていて知らないふりをしてほしいんだ」

修理工はうなずいた。

「そいつはあんたに金を払おうとするだろう。もらっておけばいい。そして、おれは北に向かったといってくれ。レッド・ハイウェイをパラダイスに向かったと。『北のパラダイスへ』そういっていたと」

「だがあんたはどこか、まったくちがうところに向かうだろう」

「まあそんなところだ」笑いながら、ファーザー志望者はバスにもどろうとした。

そのときサンダーがたずねた。「ほんとうに持っているの？」

「黙れ」父が制止しようとした。

しかし緑色のシャツの男は微笑みたくなったのだろう。振り向いて十三歳の男の子をみつめるとたずねた。「なぜだ？ そういうものに興味があるのか？」

「もちろん」

男は笑っていった。「そうだろうな」

サンダーは年の割には小柄だったが、大胆で、いろいろなことをとてもうまくやっていた。ほとんどの人が怖じ気づくような状況で、もっとも勇敢になった。「小型のクラスDだね？」

それを聞いて男はサンダーをまじまじと見つめた。「そう思うのか？」

「充電も完了している」サンダーは、考えられる三つの製造メーカー名を挙げた。「通路に据え付けたんだ。バスの中央に」

「そうすべきかな？」

「レッドゾーンの範囲はどれくらいだっけ？ 三十、三十五フィート？ そんなに大きくないからね」

「それだけあればじゅうぶんだ」

そのとき、だれかがバスのクラクションを鳴らした。姿を見せない弟かもしれない。だれにせよ、クラクションはうるさく鳴りつづけた。

「家畜は連れていかないんだね」カーラの兄はいった。

今度は母がサンダーに黙りなさいといい、頭をぶとうとするように片手をあげた。

「ハリウサギ」男はいった。「それにムラサキニワトリだ」

両親が口をそろえた。「黙るんだ」

またクラクションが鳴った。

しかし緑色のシャツの男はしつこく食い下がった。「おまえならどうする？ もしおれの立場だったら？」

「最低でもクラスBリッパーは欲しいな」サンダーははっきりいった。「ぼくだったら、役に立つ動物も連れていくね。乳を出す動物だよ。それに選べるなら、兄弟と厄介な思いはしないだろうね」

「見たところ、兄弟はいないようだな」

「それで、何人なの？」サンダーの声の調子から、なにをたずねているのか明らかだった。「六人？」「八人？ それとも十人？」

「シーッ」母は必死だった。

緑色のシャツの男はなにもいわなかった。

「知りたいだけさ」サンダーはしつこく食い下がった。「遺伝子プールはできるだけ大きくしておいたほうがいいよ。みんなそういつている。本で読んだけど、それが成功を保証するんだって」

男はサンダーに向かって中指を振った。「ああそうだな、もうひとり連れていくべきかもしれないな？ 念のために」

たちまち部屋の空気がぴんと張りつめた。

緑色のシャツの男は母と娘を見た。それから静かな怒りのこもった声で、うなるようにいった。「ふたりとも運が良かったな。もう席がないんだ」それから男は振り向いてバスに戻り、ドアの鍵を開けて乗りこんだ。すぐに中で待っていただれかがバスを発車させ、給油ポンプから離れていった。

しばらく全員が荒く深い息を楽しんだ。

それから修理工がいった。「あのばかの末路がどうなるか目に浮かぶようだ」

「あんな去り方をしてはいかん」父もいった。「あれっぽちの物資だけで生きていくなんて想像もつかない」

「あいつのことは忘れて」母がいった。「なにかほかのことを話して」

カーラはひとりで、行方不明の少女たちのポスターをまた見にいった。この中の誰かが、あのバスに乗っていたかもしれない——それも自分の意志ではなく。でもだれも当局に通報するつもりはないのだ。男たちはあのファーザー志望者を非難し、母は話題を変えてくれという。でもだれも、あの愚か者の妻たちのことはなにもいわないのだ。カーラはかわいい少女たちの顔写真に触れ、短い経歴を読んだけれど、そのときでも、だれかが力強く勇敢な声で抗議のことばを発するべきだとは思ってもよらなかった。

2

歴史上、ファーストファーザーほど重要な人物はいなかった。彼こそ、人類がこのすばらしい世界にやってきた理由であり、あらゆる教会は、彼のおかげで存在した。しかし彼は謎めいてとらえどころがなく——時と想像の彼方の不可知の存在だった。その創始者についてまったく同じ人物像をもつ教会はふたつとなかった。簡単な経歴は、どの教科書にも同じものが載っていたが、教師が教えてくれることは、頭のいい女の子がどこか大きな図書館の書棚で調べられることとかなり異なっていた。実際のところ、彼は謎の存在であり、こと彼に関してはほとんどあらゆることが可能だった。それらに共通しているのは、ファーストファーザーは旧地球の二十世紀末の生まれで、ある春の火曜日の朝、二十九歳になったばかりのときに運命をかけた行動に出たということだけだった。

人類は初期のリッパーを発明したばかりだった。その機械は荒っぽく気難しい研究用の道具で、物理学者たちは局所現実に一時的な穴を開けるためにそれを使った。ほとんどの穴は苛烈な真空か信じられない低温につながっていた。多元宇宙のほぼすべての領域は空虚な空間だった。しかし量子効果と位相的高調波が道を示してくれた。不可視な次元に沿ってリッパーで穴を開けると、そこには安定した島ができるのだ。この島は二十億年ほど前に「現在」から分岐したもので、穴の向こう側には無数の姉妹地球が存在し、それぞれが人類の地球と同じ運動と質量を授けられていた。

突然、科学のあらゆる分野がこの研究に並々ならぬ関心を抱いた。大きな学校やちいさな国々が自前のリッパーを保有するようになった。生物学者は大気と土壌の微細なサンプルを手に入れた。サンプルには細菌や胞子がふくまれていた。いずれも新種だったが、すべて地球の生命の成分を共有しており、そのDNAはヒトやメヒシバの内部にみいだされるタンパク質ときわめてよく似たタンパク質群をつくるのと同じ種類のアミノ酸をコードしていた。

天地創造は不断かつ無限のプロセスであった。人類が学びつつあったのはまさにその事実であった。そして適切な道具と瞬間的な巨大なエネルギーさえあれば、それら無限の領域に手をのばし、無限の極小の部分調べることができるのである。

しかしリッパーにはもうひとつ、もっと投機的な潜在力があつた。その同じ恐るべきエネルギーを少しだけ違う方法で集中させれば、穴の形と性質が変わるのである。その一時的な空間の崩壊は、三つのもっとも容易な次元に沿って広がり、機械と局所的風景をプラズマの泡で包みこむ。その泡はまるで船のようにはたらき、中に包んだものごと、計測不可能なほど小さくて普通の物質には通過できないような隙間を通過させるのである。

たとえ何者であろうと、ファーストファーザーはリッパーになにができるか理解していた。ほとんどの教会は彼を洞察力のある科学者だとしている。しかし歴史学者は、それには年齢が若すぎるとして、前途有望な大学院生だったと考えていた。そして一部には、彼はただの検査技師のようなもので、ある程度の知識と正常に動作するリッパーに近づく機会があっただけの凡人だったと考える者もいた。

ファーストファーザーはだれにも気づかれぬように、超伝導バッテリーひと組を盗み出した。そして何週間も何か月もかけて、都市ひとつを明るく照らせるほどのエネルギーをバッテリーにためこんだ。さらに種子や医薬品、さまざまな道具、百人の人間が数か月生きていけるだけの缶詰など、大量の物資を買うかあるいは盗んだ。彼はひとりで物資を二台のトラックに詰めこんだ。そして四月のうつつの夜、トラックを重要な地点まで運転して行って、駐車禁止の標識の横に止めると、ブレーキをかけてタイヤの空気を抜いた。三台目のトラックを物理学研究所の横にある荷積みドックに慎重に入れた。鍵もしくはパスワードをつかって、若者は地球上でもっとも強力なリッパーのひとつを手に入れた。それは棺おけより少し大きな電子機器と瓶入り零空間の集まりだった。

若者は獲物を転がすか抱え上げるかしてトラックに運びこんだ。そして素早く慣れた手つきで、リッパーを充電が完了しているバッテリーに接続し、新しいソフトウェアを挿入した。そしてだれにも見とがめられないうちに、トラックのエンジンをかけて、暗闇の中に走り去った。

偉大な人間は偉大で勇敢な行為によって定義される。まともな宗教はすべてこの疑う余地のない真実を認めている。

ほとんどの言い伝えによれば、その夜は異常に暖かく、空気は湿っていて、翌日は快晴になりそうだった。午前四時、ファーストファーザーは高い縁石を乗り越え、草に覆われた前庭をじわじわと進み、檜の木と伸び放題のトウヒのあいだを抜けて、ターゲットにぴったり車を寄せた。それは立派な円柱と死んだ言語から引用された黒い文字で飾られた大きな白い建物だった。それから彼はエンジンを切り、おそらく少しのあいだじ

っとしていただろう。しかし彼の勇敢な頭脳に深刻な疑念が入りこむことはなかった。彼は車を降りると後部のドアを開けて盗んだリッパーのスイッチを入れ、いくつかのボタンを押して一連のナノ秒の爆発を起こすために必要な電力をコンデンサにためた。

その夜についてはさまざまな話が伝わっていて、どれが真実なのかはだれにもわからなかった。カーラが十一歳のとき気に入っていたのは、早朝にもかかわらず、試験勉強のためその時間に起きていた女子学生の話だった。彼女はディーゼルエンジンの音と金属扉が震える音を聞いて変だなと思った。しかし彼女の部屋は大学の女子寮の裏側にあり、窓からは駐車場と並木道しか見えなかった。ようやく彼女の注意を引いたのは、小さいが強力な連続した爆発音を伴うリッパー特有の——人間の耳には高すぎる——金属音だった。多元宇宙に新しい穴があき、隣接した世界がむきだしになった。ごくわずかな大気が回収され、それらはあらかじめ設定された一組のパラメータと対照された。爆発音を聞いて、女の子は立ち上がって窓辺に近づいた。その時リッパーの動作がとまり、百兆の計算がおこなわれて、ふたたび発火した。つぎの爆発音は雷のような轟音だった。すべての光が消え、キャンパスはなくなり、地面と草、空気と木を包みこんだ球体が、ひとつの世界からもぎとられた。建物全体、その庭、物資を積んだトラック、建物の前の道路、駐車場とその後ろの小道がもっていかれた。そして無から新しい世界があらわれた——われらが究極の父である神からの、ふたつ目のすばらしい贈り物である。

その女の子が歴史的イベントのただひとりの目撃者だったという事実が、カーラをこの話に引きつける理由だった。

ファーストファーザーはなにも見ていなかった。人生の重大な瞬間に、盗んだリッパーの上にかがみこんで、データを読みとり、人工知能のタスクマスターからプロンプトを受け取っていたのである。

女の子は駆けだした。ほとんどの言い伝えによれば、彼女は小柄でずんぐりしていて、美人ではなく、恐れ知らずで慎みがなかったという。下着姿で、真っ暗な廊下を走りながら大声でほかの女の子たちを起こし、階段を駆け下りて玄関から外に出た。カーラがすばらしいと思うのは、彼女が別の地球の空気を最初に呼吸したという事実だった。空気はよどんでいておいしくなかった。周囲の暗闇から生き物がたてる音が聞こえてきた。聞き慣れない甲高い鳴き声や叫び声がして、木々の枝は淡い月光の中で風に揺れていた。女の子はふと空を見上げ、いままで見たこともないほどたくさんの星を見た。(姉妹世界は双子のようなもので、黄色い太陽とクレーターだらけの月も同じだ。しかし太陽系の動きはきわめてカオス的出来事で、銀河系のどこに出るかは行ってみるまでわからないのである。) 彼女は歩道に立って、ゆっくりと驚くべき光景を受け入れていった。そのときドッドッというエンジン音がした。振り向くと、ビャクシンが絡み合った茂みのところに長いトラックが止まっていた。彼女は裸足のまま後部からトラックに乗りこみ、たくさんの黒いバッテリーを乗りこえた。作業に没頭していたファーストファーザーは彼

女に気づかなかった。ひとつ仕事は終わったが、別の大切な仕事に全神経を集中させなければならなかったのだ。百人の若い女たちを、だれもいない、なんとか居住可能な世界に連れてきたのである——だれひとり逃がすつもりはなかった。彼は熱くなったリップパーをこじあげ、複雑な内部をむき出しにして、そのもっとも脆弱な部分をバールでめった打ちにした。あまりに熱中していたので、未来の妻のひとりがそばに立ち、パンティーとブラジャーだけの姿で、わずかに魅了されたような表情を浮かべているのにも気づかなかった。

3

一週間以上にわたってカーラの家族は借りもののテントで寝泊まりし、間違いなくこれまでで最高の休暇を過ごした。キャンプ地は、山腹にある公有地のでこぼこの部分だった。日当たりのよい土地のところどころにビャクシンの木が生えて、近くの峡谷にはトウヒが生い茂っていた。峡谷の奥で見つけた小川は、泳いだり水浴びしたりするのにもってこいだった。なかば野生のルーディアが好きな場所で草を食んでいた。朝はリリィバードの耳障りな声やムクドリのさえずりが聞こえた。テントはひどい状態だった。ロープはなく、屋根の破れたところはへたくそに継ぎがあてられていた。けれども熱波のおかげで雨に降られる心配はなく、たとえひどく暑い日でも夜は心地よい涼しさで、満月前後の明るい月に照らされていた。

カーラはそういった冒険にぴったりの年ごろだった。なんでも記憶できるほど若い、ひとりで探検に行けるくらい大人でもあった。そこは人気の場所ではなかったのも、まるで森を独り占めしているような気分だった。それになによりすばらしいのは、山を登ったところに自然保護区が広がっていたことだった。

兄が機械を大好きなように、カーラは生き物が大好きだった。

法律によって、保護区は手つかずの原野に保たれているはずだった。この世界に持ちこまれた種は、高い柵の中には存在しないはずだった。しかしムクドリはどこにでも飛んでいくし、ゴールドウィードの胞子はかすかな風で運ばれる。それに訪れる人たちがいくら気をつけていても、衣服についた種や心の弱さまでは防ぎようがなかった。

ある朝、一家は車で高原に出かけた——危険な冒険だった。車はまだ熱く、不凍液が漏れていたからだ。ハイウェイはせまく、どこまでいっても曲がりくねっていた。土着の樹木のけばだつような黒い森が、湿った冷たい雲にとって代わられた。父はスピードを落とし、後続の車にクラクションを鳴らされて、またスピードをあげ、岩がごろごろしている斜面に出た。残雪のそばにブラックファズが生えていた。一家は展望台で車を停めて、まったくの異世界に驚嘆した。カーラと兄は雪玉をつくり、勇敢にも分水嶺に立ってポーズをとった。父はここで引き返し、行きよりもゆっくりと、雲と黒い森を抜

けて山を下りていった。全員が同時に、「お腹がすいた！」と言い出した。魔法の旅だから、すぐに森が開けた場所が見つかり、幅の広い氷河流と彼らのためにつくられたような赤花崗岩のテーブルまであった。

昼食はカメのサンドイッチとサワーチェリーだった。雲が厚みを増し、遠くで雷鳴が聞こえた。でもたとえ雨が降るとしても、どこか別のところだろう。カーラはテーブルに背を向けてすわり、川の匂いと見たことのない木の胡椒のような香を満喫した。これまでたくさんの本を読み、ドキュメンタリー番組を見てきたが、この聖地は驚きだった。それは果てしない啓示であり、人間がやってくるまでこの世界を支配していた生き物たちがここに生きているという思いだった。気候がもっと温暖で土壌が肥沃だったら、この保護区は生き残れなかっただろう。恵まれていると彼女は思った。それはいままで感じたことのない幸福感だった。じっと影をのぞきこんで、イワヒツジ、トゥームトゥーム、ぶざまな動きのハリーズ・ビッグ・デイといった野生動物を想像した。日常の生活で動物と言え、ルーディアやムクドリなど、ファーストファーザーが連れてきた動物だけだった。作物や数百種類の野生植物も、人間が種や孢子という形でこの世界に持ってきたものだった。でもこの古い山々には別の秩序が、人の手が入らない正常さがあった。けばだつような黒い森は、トウヒの森とはまったくちがっていた——材木にするには柔らかすぎて、薪にするには水分が多すぎる、美しいが使い道のない樹木の森だった。

ふいに、ほっそりとした影が、影から影へととびうつった。

なんだろう？

カーラはゆっくり立ち上がった。兄は分厚い冒険小説を読みふけていた。両親は娘のほうを見て微笑みかけ、また会話に戻った——きょうの午後と夕方はなにをしておそうか？ カーラはストーカーのような足どりで、森の中に入っていった——涼しく、ピリッとしたいい匂いがした——そこで立ち止まり、瞬きもせず、首を傾げながら、山腹のあたりで雷が鳴るごろごろという音に耳を澄ませた。

なにか乾いたものがふくらはぎに触れた。

カーラは身をこわばらせて下を見た。

イエバエが舞い上がり、くるくると回ってカーラのむき出しの腕にとまった。カーラは殺生は嫌いだったが、この生き物はこの世界のものではない。人間が連れてきた生き物だ——もともとは偶然だったが、蛆がゴミの処理に役立つので、今は大事にされていた。カーラは右手の掌でハエを叩き、ひざまずいて目と指で落ちたハエを探しだすと、二本の指で元の姿をとどめないほどひねりつぶした。

そばにすわっていた野生の猫がカーラを見ていた。カーラは立ち上がろうとして猫に気づいた——大きな雄のとら猫で、大型の罠にかかっていた。保護区のあちこちに猫の形をした標示板があり、野生化した捕食動物について観光客に警告していた。そうした動物たちは環境にとっては悪夢なのだ。一匹の殺し屋は、その一生に野生のウィスプマ

ウスやその他のひ弱な動物を数千匹殺すのである。なかでも雄の猫は最悪だった。害獣を数十匹単位で増やし、野生動物の大虐殺を拡大するからである。

カーラは猫に近づき、ひざまずいてその明るい緑色の目をのぞきこんだ。毛が絡まっている以外、どこも野生動物らしいところはなかった。手を伸ばすと、猫は冷たい鼻で彼女の指先に触れてきた。この猫のような外来種は必ず殺される。例外はない。でも捕まえて、家に連れ帰ることはできるかもしれない。一生懸命頼めば、両親だってきっと許してくれるだろう。カーラは罫の構造を調べ、丈夫そうな棒を見つけてきて隙間に滑りこませた。ぐいっと押すと、金属の扉がポンと開いた。

ずっと野生で暮らしてきた猫は、なにをすべきか心得ていた。カーラは扉をはずすとすぐに猫の首に手を伸ばしたが、相手のほうがすばやかかった。猫は暗い影の中に走り去り、残されたカーラは多くのことを考えたが、うしろめたさとともに、意外にも大きな安堵感をおぼえていた。

「なにか見つけたかい？」父はもどったカーラにたずねた。

「なにも」カーラは嘘をついた。

「今度はカメラを持っていくといい」

「まだトゥームトゥームを見ていないわ」母がいった。「帰る前に一度よく見てみたいわね」

カーラは兄の隣にすわった。兄は本から目をあげて、しばらくのあいだ、カーラが食べかけだったサンドイッチを食べるのを見ていた。

その日、一家は広大な黒い牧草地にあるちいさな博物館を訪ねた。校外学習にやってきた熱心な生徒のように、展示を順番に見てまわり、この山地がどのようにしてできたのかとか、なぜ氷河ができてなくなったのかといった断片的な知識を学んだ。展示ケースにはたくさんの化石が詰まっていた、地下には人間がその役割を果たしてきた過去数世紀につくられた工芸品が並んでいた。しかしこの日いちばん印象的だったのは、この保護区で働いている、ずんぐりして不器量な女性だった。耳障りな大声で話し、大きなポケットのついた地味な茶色の制服につばの広い帽子をかぶり、考えつくあらゆることがらについて豊富な知識をもっていた。

彼女の仕事は、博物館にやってきた人びとを周囲の遊歩道に案内することだった。慣れた口調でこの世界について、また知られている近くの世界について語った。ファーストファーザーからラストファーザーまで、十七の宇宙が植民された。その間に五十の世界への偵察が行われ、不適當だと判断された。旧地球とその姉妹はひとつの無限の家族に属しており、基本的な表面は同じだった。ユーラシアとアフリカ、オーストラリアとふたつのアメリカがあった。北極は海で、南極には島もしくは大陸があった。浸食による多少の増減はあるが、陸塊は一定だった。分かれて二十億年程度では、どの地球もま

だ属していた家族を忘れていなかったのである。

しかし岩やテクトニクスは予想できても、ほかの要素は予想がつかなかった。些細な要因が気候や大気の組成を変えてしまうのだ。たとえばカーラの地球のように、湿って暖かい地球もあった。ほとんどは似たような大気が存在したが、まったく同じものはひとつもなかった。いくつかは人類に非常に厳しい環境だった。よく知られているように、酸素サイクルやメタンサイクルは不規則である。生物が出す過剰な温室効果ガスによって地表が高温になり、海が干上がって雲ばかりの生物圏になってしまったところもあった。また、彗星の衝突や超新星の通過のせいで永遠に不毛な地球もあった。しかしそうした落とし穴は、正常に動作するリッパーによって簡単に見分けられた。ファーザーたちは、微量の空気を分析して、もっとも有害な場所をあらかじめ知ることができた。女性講師は、驚くほどの熱心さで、とても魅力的な世界について力説した。だれでも歴史上の例は知っていた。過酷な一年か二年を経て——マッティズハウスの場合は惨めな十年を要したが——君臨するファーザーは希望がないと判断すると、開拓者たちを再結集させ、リッパーの残る力を利用して、別のよりよい世界へと跳ぶのである。

「わたしたちはすばらしい世界に住んでいます」女性は、土着の樹木にもたれて、そういった。「長く続いた氷河期がちょうど終わり、生存に適した気候をもたらしました。北の土が暖かい南に運ばれて、わたしたちがよくアイオワとかオハイオとかウクライナと名づける黒い土地をつくりました」

世界を称賛する彼女のことばに、観光客は同意し、うなずいた。

「それにわたしたちは豊かな経験にも恵まれていました。わたしたちの祖先はなにを持ちこむべきか、どうやって適応すべきか、遠いむかしに学んでいました。わたしたちの文化は、あらゆる面で、短期間の成長を可能にする条件がそろっていました。十世紀はけっして長い年月ではありません——世界にとっても、わたしたちのような若い種にとっても——でもその短い年月で、わたしたちはここに五十億人の住む家を築いたのです」

人びとは微笑みを浮かべてうなずいた。

「でも、わたしたちがもっとも恵まれていたのは」そう言って彼女は口を閉じ、年老いた賢そうな目で聴衆を値踏みするようにみつめた。「わたしたちが途方もなく幸運だったのは、この世界が非常に弱かったということです。その理由は推測するしかありませんが、ここでは自然選択がゆっくりと進みました。この野生動物はおおざっぱに言って、旧地球のペルム紀と同レベルです。もっとも賢いトゥームトゥームでさえ、まったく賢くありません。そしてどんな善きファーザーでも知っているように、知能こそ新しい家についてときに測るべき最初の性質なのです」

カーラは大人たちが賛同しているのに気づいた。これがポイントだった。女性は聴衆のなかの若い男性に向かって話し、彼らがファーザーになりたいと思ったときのためのアドバイスをしているのだった。

だれかが発言を求めて手を挙げた。

「はい」ガイドはいった。「ご質問ですか？」

「質問でもいいのだが」手を挙げたのはファーストファーザーとおなじ薄茶色の目をした、豊かな白髪の子配の紳士だった。「それよりも意見を申し上げたくてな。今朝、わたしはパッション湖のトレイルをハイキングしていた——」

「ずいぶん遠くまで」紳士の健脚ぶりをほめようとして、女性はことばをはさんだ。

「蚊に食われたが、それはいまにはじまったことではない。そしてリリィバードがニセトウヒにとまっているのを見た」リリィはセカンドファーザーの世界の鳥である。「それにネズミ——われわれのネズミ——が、下草の中にいるのを見かけた。その下草は、野生化したオレオウィードそっくりだった」

オレオウィードはファーストファーザーの世界からやってきた、二万年前から人類と共存している植物だ。

ガイドはうなずきながらつばの広い帽子を直し、平静を装っていた。「たしかに保護区には外来種が入りこんでいます」彼女は認めた。「規則や制限事項にもかかわらず——」

「正しいことなのだろうか？」白髪の男性は彼女のことばをさえぎった。

「なんとおっしゃったのですか？」

「正しい、と聞いたのだ」男性はくり返した。「間違っていない、責任ある行い。われわれがここでやっていることは……無力な惑星を損なう価値のあることなのだろうか……？」

聴衆は男性の意見に面食らうか、完全に無関心かのどちらかだった。観光客の半分はそっぽを向いて、その辺の岩や独特の柔らかい樹皮に興味を尽きないふりをしていた。

ガイドは食いしばった歯のあいだから山の空気を吸いこんだ。「統計があります。こちらにいらっしゃるみなさんは全員ご覧になったことがあるでしょう。ファーストファーザーは最初の開拓者でした。しかし旧地球から人びとを連れ出したのは彼だけではありません。でもたとえ、そのひとりの男性とその妻たちだけを考えたとしても、その最初の世界から何人のファーザーが飛び出していったか考えてみても……そうしたファーザーたちの半分が、放浪好きの若者でいっぱいの家をつくったとして……計算すれば、現時点で、最初の例から百万もの植民地ワールドが生み出されたことになります。そしてその百万がそれぞれ、別の百万の世界を見つけて——」

「幾何級数的な増大だ」男性が口をはさんだ。

「私たちがこのことから理解するように、無限の天地創造の内部には」彼女は断固たるよろこびをこめていった。「世界には限りがなく、多様性も限りがないのです。どうして人類がその無限をできるだけ活用してはいけないのでしょうか？」

「するとこれはみな倫理的にちがいないというのだな」白髪の男性は感じのよい微笑みを浮かべてはいたが、その態度は皮肉たっぷりだった。「わたしがいいたいのは、あなた

私たちはいずれ失業するということだ。いずれ——まもなく——この美しい土地はわれわれの世界と同じようになって、同じ雑草やつる植物がはびこり、二十兆の人間の住む場所とまったく同じになるからだ」

「そうです」女性は満足げに言った。「将来はそうなります」

ガイドはカーラのほうを見てはいなかった。しかしそのすべてのことばが自分に向けられているような気がした。生まれて初めて、彼女は避けることのできない未来を見た。この異質な森が大好きなのに、この森は生き残れないのだ。果てしない破滅がその景色を覆いつくしているような気がして泣きたくなった。兄が彼女の様子に気づいて、気づかうような微笑を浮かべていった。「いったいどうしたんだ？」

いえなかった。自分のなかの激しい気持ちをどうやってことばにしたらいいのかわからなかった。でもあとになって、家族で駐車場にもどっていくとき、彼女はまたあの野生の猫のことを考えた。そして純粋な怒りから、あの生き物を罠に閉じこめておけばよかったと思った。いっそのこと、あの長い棒で叩き殺してやればよかったのだ。

4

もっとも献身的な妻たちは新しい世界での冒険について書き残した——ファーストファーザーの聖典の七つの書物である。かなり多くの教会がサラのふたつの日記も聖典に含めていて、カーラの家族が所属しているところのように、より進歩的な教会は、六人の怒れる妻たちまで採用していた。混乱に拍車をかけているのが、数百とまではいかないが数十ほど残る、あまり知られていない人物による文書や断片的な記述と、よくて作り話、最悪の場合まったくの異端と考えられている悪名高い文書の存在だった。

カーラが十二歳のとき、年長の少女が読み古された小冊子をくれた。「わたしがあげたっていわないでね」少女は釘を刺した。「読んだらだれかにあげるか、燃やしてしまうこと。約束してくれる？」

「約束するわ」

歴代のファーザーたちはこの文書を厳禁してきたが、いつも誰かが少なくとも一冊は、つぎの世界にこっそり持ちこんでいた。『ファーストマザーのお話』は三人称で書かれたクレアの伝記だといわれている。クレアは五十歳の未亡人で、女子寮と大切な女の子たちの世話をする寮母だった。クレアは思慮深く、実際的な女性だった——わたしの母とは違うわ、とカーラは残念に思った。人類のもっとも重要な日、寮母は叫び声と取り乱した泣き声で目を覚ました。バスローブをはおってスリッパをはき、一階にある私室を出た。すぐに慌てただれかの腕につかまれて、暗い廊下をひっぱられていった。十数人の声が、なにか恐ろしい事件について話していた。停電していることにカーラは気づいた。しかし大地震があった様子ではなかった。建物の壁は無傷だった。火事や洪水でもな

さそうだった。なにがあったにしても、デルタ棟の姉妹たちの写真の額が壁に掛かったままなのだから、たいしたことはないだろう。

そしてクレアは玄関を出て、とまどった。通りに二台の大型トラックが止まっていた。でもキャンパスは？　トラックの向こう側の、美術学部があったはずの場所には、灰色の土と灰色の石と木の幹の、ごつごつした山があるだけだった。山の向こうは見たことのない柳のような木の森があった。なんとも形容しがたい匂いと灰色の霧が、森から吹く微風に運ばれてきた。月と無数の星に照らされて、硬い皮をもつ生き物の群れが木の枝にとまり、数百もの単純な黒い目が新来者を見つめていた。

ファーストファーザーは玄関の階段の中ほどに腰かけて、鹿撃ち用のライフルを膝にのせ、足元には銃弾の箱を置いていた。彼は手を震わせながら、薄茶色の瞳で最初の朝焼けを見つめていた。

女の子たちは各部屋から、あるいは非常階段からおもてに出てきた。ひとりで、また何人か連れだって、古い世界の端まで歩いていき、もっとも勇敢なものは盛り上がった土に登って見慣れぬ風景を眺めてからもどつてくると、露に濡れた芝生に集まって、この世界でただひとりの男を見つめた。

クレアはバスローブをびったりとからだに巻きつけ、ファーストファーザーの脇をすり抜けた。

こんな日が来ようとはいままで考えたこともなかったが、クレアはなんとか笑顔をつくり、女の子たちを元気づけ、必要と思えば抱きしめてやった。彼女は女の子たちに、大丈夫よといった。授業に間に合うように帰れるわ。クレアは三台目のトラックに注意を向けた。トラックは建物のそばに停まっており、アコーディオンドアが上げられて、荷積み用の傾斜台が草の上におろされていた。クレアは傾斜台をのぼり、内部にある見たことのない壊れた機械を見つめた。リッパが作動する音を聞いた女の子——見えない次元を越えるジャンプの唯一の目撃者——が仲間たちに話をくり返していた。クレアも聞いてみた。それから物理学専攻の子を何人か集め、リッパが本物かどうかたずねた。本物だった。それはこんなひどいことができるのか？　もちろん。クレアは息を呑み、恐ろしさに身をすくませた。それから、彼女たちの知識と手持ちの道具をつかって、このひどい事態を元どおりにする可能性はあるかとたずねた。

元どおりにすることは不可能だった。たとえリッパを修理できたとしても、ここにいるだけひとりとして家には帰れないだろう。

「どうして？」クレアは諦めきれずにたずねた。「このリッパではだめかもしれないけど、この機械の壊れていない部品と新しい部品を組み合わせると新しいリッパをつくったら……？」

女の子のひとは、成績優秀な学生だった——四年生で、物理学と数学のふたつの学位を取得して卒業を控えていた。彼女の名前はカーラと言った——この偶然に、本を讀

んでいたカーラは胸を高鳴らせた。本の中のカーラは、はっきりと、厳しい意見を述べた。部品を直すことは不可能だと彼女はいった。リッパーが使われるのを何度も見たことがあり、ときにはその操作を手伝ったこともある。だからここにいるだけよりも、リッパーの能力と限界を理解している。多元宇宙をわたってもこの世界にたどり着くのは限界に属する。最初のカーラはクレアと仲間たち数人に、宇宙は無限であること、世界のどの立方ナノメートルの空間にも、何兆もの潜在的目的地が内包されていることを説明した。

「異世界ということ？」クレアがたずねた。

「もうひとつの地球です」カーラはいいかえた。「二十億年以上前に、この世界はわたしたちの地球から分岐しました」

「どうして？」

「量子法則です」カーラはそれ以上説明しようとはしなかった。「すべての世界はつねに、新たな多数の可能性に分岐しているんです。そこには巧妙かつ微妙な調和が働いており、わたしにもよくわかりません。でも、だからこそリッパーはこのような地球を見つけることができるのです。二十億年とおよそ半ナノメートルが、わたしたちの故郷とこの場所とを隔てているのです」

寮母には信じがたい話だったが、クレアは最善をつくした。

カーラは暗い見通しを語りつづけた。「たとえいますぐ、スクリュードライバーを使って二分で修理できたとしても、わたしたちの地球はもうみつかりません。塵でできた世界の中で一粒の塵を見つけるようなものなのです。それほど難しいのです。不可能なのです。わたしたちはここに閉じこめられ、オーウェンもそのことはわかっています。そしてそれが彼の計画の一部だったはずです」

「オーウェン？」クレアはたずねた。「それが彼の名前？」

カーラはうなずいて、銃をもった男にちらっと目を向けた。

「するとあなたはオーウェンを知っているのね？」

女性がある種の男性の存在に不快感をおぼえたときにそうするように、カーラは目玉をぐるっと回してみせた。「物理専攻の大学院生です。よく知っているわけじゃないけれど、たしか信託財産があって、何年間も修士論文に行き詰まっていた」それから一息おいて、カーラは打ち明けた。「デートしたことがあります。去年。一度か二度ですが。それから、わたしからいいだして別れました」

これは生きているカーラにとって驚くべき新事実だった。新しい世界に自分の名前を持ってきた女性は、ファーストファーザーと恋愛関係にあった。それから彼をふった。ひょっとしたら、オーウェンはまだ彼女を好きだったのかもしれない。彼女を好きだから、自分のものにしたかったのかもしれない。もしもこの世界が——無数の生命と愛を支える土台が——恨みを抱いた恋人の復讐によって生まれたのだとしたら？

しかし重要なのは動機よりも結果だった。

オーウェンの動機がなんであれ、女の子たちはすすり泣いたり、芝生にすわって膝に顔をうずめ、自分たちの直感が告げる事実を拒絶したりした。クレアはじっと立ちつくし、カーラとほかの女の子がいったことを理解しようとした。そのあいだに、もとの地球の太陽とまったく同じに見える太陽がのぼり、すぐに空気が暖かくなった。翼をもった土着の生物がさっと低く飛び、そのうつろな目で新参者を観察した。小部屋ほどもある、カメに似た巨大な生き物が、ゆっくりと盛りあがった土をのぼり、滑って芝生の上に下りてきて、うまそうに草をはみはじめた。イエバエやシロアリ、タンポポの種やミミズは新世界への移住をはじめた。マルハナバチやムクドリは餌をさがすために巣から飛び出し、オオアリは土着の樹木によるこんでかじりついた。ファーストファーザーについてはさまざまなことが伝えられているが、これだけははっきりしている。彼はきわめて幸運な人間だった。最初の新しい世界は、地球の生物が好む環境に恵まれていた。二匹の野良猫も運のいい入植者の仲間だった。一匹は物置で丸くなり、生まれたばかりの子猫たちの世話をしていた。もう一匹は妊娠したばかりだった。その遺伝子プールに、ある女の子が女子寮でこっそり飼っていた三匹の子猫もくわわった。その女の子の身元も、そしてひょっとしたら彼女の遺伝子も、ずっとむかしにこの世界から消えてしまった。

そのすばらしい朝、ふたつの世界が結婚したのである。

聖典によって相違があり、それぞれ信憑性もあったが、そうかもしれないというレベルにすぎなかった。カーラはクレアの異端の物語がいちばん気に入ったし、ほんとうのこのように思えた——女たちはひどい状況に追いこまれたが、生き残るために、立派に最善を尽くしたのだ。

「こんにちは、オーウェン」クレアは話しかけた。

若い男はまばたいて、自分の前に立っている中年女性をちらっと見た。クレアはまだバスローブと長いネグリジェとスリッパという姿だった。オーウェンにとって彼女は、まったくどうでもいい存在だった。彼は軽くうなずいてなにもいわず、遠くを見つめたまま、その目は興奮にきらめいていたが、目の隅には眠気が忍びよっていた。

「なにをしているの、オーウェン？」

「みんなを守っているんだ」彼は格好をつけていった。

クレアはできるだけ穏やかな声でたずねた。「わたしたちをなにかから守っているの？」

若者は何も言わなかった。

「オーウェン」クレアはくり返し呼びかけた。一回、二回、それからさらに二回。

「すまなかった」彼は頭上で皮膜の翼が舞うのをみつめながらいった。「リッパーには計測器がついている。それによればこの酸素は通常の八十パーセントだ。高い山地で生活するのと同じだ。それについては悪かったと思っている。パラメータの幅を広くしす

ぎた。当分のあいだ、動作をゆっくりとして、からだを慣らすしかないだろう」

クレアはため息をついた。それから最後にもう一度たずねた。「わたしたちをなにから守っているの、オーウェン？」

「わからない」

「ここになにがいるかわからないの？」

「そうだ」彼は両手をライフルの銃床に置いたままで、肩をすくめた。「さっきカーラと話していただろう。教わらなかったのか？ 新しい世界について知る方法はないんだ。リッパーが空気を検査し、酸素と水と、地面が近くにあることを示すマーカ―分子を見つけたら――」

「あなたはわたしたちを誘拐したのよ、オーウェン」クレアはきっぱりと、だが慎重な怒りをこめていった。「断りもなくわたしたちを誘拐して島流しにしたのよ」

「おれだって島流しだ」彼は反論した。

「それでわたしたちの気が晴れるとでも思うの？」

ついにオーウェンはクレアをよく見た。ひょっとしたら、このときはじめて、この思いがけないワイルドカードへの認識を深めたのかもしれない。

「なんでも好きな気分になってくれ」彼はクレアと、声が聞こえる範囲にいる女たちに向かっていった。「ここがおれたちの世界だ。ここで死ぬか生きるか。この状況からなにかをつくりだすか、死に絶えるかだ」

彼は弱い男ではなかった。それに、たいていの人間がするよりもずっと用意周到に、この驚くべき日に備えていた。そのときまでには、クレアにもそれはわかっていた。しかしなにより必要なのは、この男に真実を認めさせることだった。だからクレアは階段をのぼって、彼が嫌でもこちらを見るようにしむけた。「あなた射撃の腕は？ 軍隊にいたことはあるの？ いままで一度でも狩りをしたことはある？」

彼は首を振った。「いや、どちらの経験もない」

「わたしはあるわ」クレアは断言した。「陸軍にいたの。亡くなった夫はよく、ウズラ撃ちに連れていってくれたわ。あなたくらいの歳には立派な枝角のあるオジロジカを撃ったこともあるのよ」

オーウェンは彼女の話はどう受けとめたらいいかわからなかった。

クレアは彼をじっと見ていた。「ほかに持ってきた銃は？」

「なぜだ」

「あなたひとりで四方八方を見張るのは無理だからよ。この子たちに頼んで、二人ほど屋根に登って、周囲を監視してもらってもいいわ。それにだれが銃を使えるか知っておくべきかもしれない。建物を守らなければならなくなったときのために」

オーウェンは不安げに大きく息をついた。「そんなことにはならないと思う」

「ほかに銃はあるの？」

「ああ」

「どこに？」

彼は右のほうを見た。

「あのトラックの中？」クレアは肩越しに見た。「女の子たちがドアを調べたわ。鍵がかかっているんでしょう？」

「ああ」

「わたしたちが開けられないように？　そういうこと？」

彼はからだを動かし、文句をいった。「あんたがそこにいたら、よく見えない」

「そうね」そういって、クレアはぐっと近づき、たずねた。「あの南京錠の組み合わせ数字を知っているんでしょう？」

「もちろんだ」

「開ける気はある？」

沈黙。

「いいわ。それはたいした問題じゃない」

オーウェンはうなずいた。完全に状況を支配しているふりをして、ライフルを横に置き、クレアをみつめていった。「ああそうだ」

「重要なのはあなたよ。あなたは絶対に必要だわ」

「そのとおり」

「それも二、三の鍵なんかよりずっと重大な理由でね」

若い男は思わず微笑した。

「トラックの中にはなにがあるの？」

男は手短かに、古い世界から持ってきた物資を説明した。それからうれしそうにつけくわえた。「おれたちの植民地のすばらしいはじまりだ」

「それはすてきね」クレアは皮肉たっぷりに相槌を打った。

オーウェンは微笑んだ。彼女のことばだけ聞いて口調に気づかなかったのだ。

「ちょっとたずねていいかしら……その食べ物と水をいつわたしたちにくれるつもり？　あなたの気前のよさには予定表があるの？」

「ある」

「教えて？」

オーウェンはひとりよがりのウインクをすると、硬い階段でふんぞり返り、手を挙げて指を三本立てた。

「どういうこと？」

「女の子三人だ」彼はいった。それから手をおろしてつけくわえた。「どういう意味かわかるだろう？」

これも驚きだった。公式の聖典では、ファーストファーザーはすぐにすべてのドアと

箱の鍵を開けたことになっているのだ。例外なく、彼は慈悲深く思いやりがあって、女の子たちはほとんど競うようにして、彼と寝るチャンスを求めたことになっているのだ。

「わたしの子たち三人を……？」

「そうだ」

クレアは激怒のあまり声を失った。

オーウェンはくり返した。「そうだ」

「あなたが選ぶの？」寮母は低い声で言った。「それとも志願者にする？」

全員の目がオーウェンに注がれ、彼はあきらかに注目を楽しんでいて、きっと数か月前からずっと、この瞬間を、だれも否定することのできない確かで圧倒的な権力を夢見していたのだろう……そしてその力ゆえに、彼は肩をすくめて認めることもできた。「だれでもいい。志願者がいるなら、それでも構わない」

「いますぐに？」

「それか一週間後でも。どうしてもというなら、待ってやってもいい」

「その必要はないわ」

彼はますますうれしそうに笑った。「よかった」

「でも女はひとりだけ」クレアは釘を刺し、バスローブのひもをひっぱってゆるんだ結び目を締めなおした。「わたしよ」

「だめだ」

「いいえ」クレアは彼の膝に手を置いた。「それが嫌なら取引はなしよ、オーウェン。わたしといっしょに中に行くの。いますぐに。わたしの部屋の、わたしのベッドで。そしてそのあとで、あなたはわたしたちをトラックの中に入れて、持ってきた武器をすべて渡すのよ。わかった？」

若い男は顔を紅潮させた。「あんたにそんな指図をする——」

「オーウェン」クレアは彼のことばを遮った。それから辛辣さのこもった声で「ダーリン」といった。それから男の膝に置いた手ともう一方の手を伸ばして彼の瘦せたあごをつかみ、いずれは無限の世界に拡散することになる薄茶色の目をのぞきこんだ。「あなたは知らなかったかもしれないけれど、あなたくらいの歳で、あなたくらいの財産と知能があれば、わざわざこんなまねをしなくたって女とヤレるのよ」

ほんの一瞬、彼はひるんだ。

「女のことをあまり知らないんじゃないの、オーウェン？」

「そんなことはない」

「嘘よ」

彼はまばたきして、下唇を噛んだ。

「あなたは私たちがわかっていない」クレアはささやいた。「女の性質について教えてあげるわ、オーウェン。ここにいる全員があなたをたんなる無知なやつだと気づくでしょ」

う。まだ気づいていないとしての話だけど。それにあなたがわたしたちを支配できると思っているのなら……それは死ななきゃなおらない妄想だとだけいっておくわ」

「黙れ」彼はささやいた。

しかしクレアはしゃべりつづけた。「あと数週間か、せいぜいあと数か月であなたはおしまいよ」

「どういう意味だ？」

「十分な数の女の子が妊娠したら、あなたは用済みってこと」

彼は周到な準備はしたが、この明らかな可能性については考えていなかった。こわばった表情と、恐怖にのけぞったからだだが、そのことを物語っていた。

「あなたは世界中のすべての銃を持っていてもいいわ——じっさいすべての銃を持っているんだから——でもね、あなたはベッドで刺し殺される。そうよ、オーウェン。何年もたって、あなたの息子たちが成長するころには、私の寮の女の子たちは三十代後半になっているでしょう……まだまだその子たちの精子で妊娠可能だわ……」

「そんな」彼はつぶやいた。

「いいえ」そういって、彼女は彼の膝をぎゅっとつかんだ。「それとも、歩み寄ることができるかもしれないわ。銃を渡してすべての鍵を開けなさい。そのあとで、このとんでもない状況をわたしたちにとって少しでもましなものにするために、できる限りのことをするのよ」

「その見返りは？」

「老人になるまで生きられるわ。もしこの先あなたがものすごくいい人になったら、あなたの孫たちはあなたがしたことを赦してくれるかもしれない。それにもしあなたがふさわしくないほどに幸運だったら、あなたを好きになってくれるかもしれないわ」

5

カーラが十四歳のとき、彼女の教会は、百人の新婚夫婦を別の世界に送り出す手段を手に入れた。ユナイテッド・マニュファクチャリング社が、そのための特別なクラスBリッパーを製造したのである。機械の代金は十分の一税と政府の補助金で支払われ、必要物資の備蓄は現物寄付や裕福な篤志家の献金でまかなわれた。隔離された土地に標準的な半球形の建物が建てられたが、その直径はリッパーの有効範囲よりすこし小さくつくられていた。球面の壁は鉄と銅のプレートでできていた。内部の骨格はニッケルや錫など有用な金属でつくられ、屋根には純金の飾りがいくつついていた。地面は掘られ、土の代わりに高品質の肥料の層がつくられ、つぎに絶縁燃料タンクが置かれ、その上にピカピカの鋼鉄製の床が敷かれた。内部の空間は無駄なく利用された。若いカップルたちがもっていくのは、食料品と水、密閉された家畜小屋、厳選された種子、発電機とブ

ルドーザー、ひとつの都市の健康を維持できるだけの医薬品、それにふたたび文明を築くための知的物資だった。

結婚式の当日、信徒たちには自分たちの犠牲で購入されたものを見る最後の機会が与えられた。数千人の教区民が辛抱強く列をつくって並び、無菌手袋とフィルターマスクをつけて、足には不浸透性の袋をかぶせて結んだ。家畜を病気に感染させたり、無菌の鋼鉄製の床を錆びさせたりする危険をおかすことはないからだ。若い開拓者たちは十字に交差する広間に立っていた。花嫁は白いドレス、花婿はぱりっとした黒いスーツ姿で、全員がマスクと手袋をつけていた。これまでの十七回にわたる移住の恩恵のひとつに、ほとんどの伝染病を置き去りにしてきたということがあった。残る問題は、鼻風邪と、突然変異を起こしたブドウ球菌と連鎖球菌による感染症くらいのものであった。しかしそれらについても、今回の移住によって、人類はついにそうした軽い病気からも逃れられるのではないかと期待されていた。

もっとも年若い花嫁はカーラよりいくつか年長なだけだった。カーラは知り合いの女の子たちとおしゃべりをしてから、「新しい世界に祝福がもたらされますように」という決まり文句を贈ってお別れのことばにした。

どの女の子のマスクも涙で濡れていた。それぞれ理由があって泣いているのだろうが、だれがなにを思っているのか、カーラにはわからなかった。一時的な名声を楽しんでいる者もいれば、人前に出るのが怖くて泣いている者もいるだろう。花婿を心から愛している幸せな花嫁もいれば、今回の任務を神聖な使命だと考えている花嫁もいる。しかし一部の花嫁は純粋にこわがっていた。頭のいい女の子の中には、今朝目を覚まして、自分はもうおしまいだと気づいた者もいただろう。ほんとうは心から望んでもいなかったのに、大がかりな危険をとまなう事業にとりこまれてしまったのだ。

大型のリッパーの近くに——名誉ある位置に——ティナという女の子が立っていた。彼女は涙で濡れたマスク越しに、カーラにいった。「あなたが早く新しい世界を見つけますように」

「新しい世界であなたに神の祝福がありますように」

カーラは移住したいとは思わなかった。しかしほかになんといえるだろう？ ティナはもうすぐいなくなってしまうのだし、彼女にはいままで親切にしてもらった。ファーストファーザーの最初の息子を産んだ妻の名前をもらったティナは、背が低くずんぐりしていて、どこから見ても美人とはいいがたかった。しかし彼女の父は助祭だし、それに何より、祖母が孫娘の嫁ぎ先にかなりの持参金を支払っていた。花嫁候補はそうした政治的な取引について知っているのだろうか？ もし知っていたら、気にならないのだろうか？ ティナは自分の置かれた状況に感激しているらしく、くすくす笑ってカーラを引っぱり寄せ、「きょうはすてきな日じゃない？」と、まるで親友のような口調でいった。

「ほんとね」カーラは嘘をついた。

「それに明日はもっとすてきな日になる。そう思わない？」

集結婚式は今夜執り行われ、夜明けには大型リッパが轟音とともに作動することになっていた。

「ええ、あしたは特別の日になるわ」カーラは同意したが、ふいに、いつもの態度をとるのがいやになった。

ティナのうしろにあるのは、厚いビニールに包まれた入植地の蔵書だった。極薄の強化ガラスに刻みこまれた一万冊の古典は、一万年の風雨と酷使に耐えられると保証されていた。その中にはあらゆるファーザーたちに関する文書、十五人の妻たちの聖書、そしてデルタ棟の女の子たちが旧地球から持ってきた教科書の複製もあった。言語が進化するのに合わせて教科書は翻訳された。カーラはすでに、環境学入門や哲学入門、いくつかのひどい戦争について書かれた分厚い歴史書、そして『ハックスター・フィン』という驚くべき寓話など、その多くを消化していた。

ティナは若い友人が蔵書を見つめているのに気づいた。「わたしはあんまり読書しないの。あなたと違ってね、カーラ」

ティナはかなり頭が悪いといわれていた。

「でもわたし自分の本を持っていくつもりよ」花嫁の茶色の瞳だけが見えて、濃い眉がいたずらっぽい印象をあたえた。「どんな本をもっていくかたずねて」

「どんな本をもっていくの、ティナ？」

彼女はどうでもいい本の名前をいくつかあげた。そしてもったいぶってちょっと間をおいてから、「『イヴのおつとめ』も持っていくのよ」といった。

カーラはびっくりした。

「だれにもいわないで」ティナはいった。

「いわないわ。ウェディングのトランクにはなにを入れてもいいんですもの」

『おつとめ』は保守的な信者のあいだで人気があった。歴史学者たちは、この本が第二の新世界の無名の妻によって書かれたと主張していた。聖女のような人で、五番目の息子を産んだ際に亡くなったのだが、神のよき天使のひとりからのお告げを書き残していた。それは「苦しみは気高く、犠牲は純潔に通じ、あなたの子どもたちが人跡未踏の地を歩くとき、あなたの人生はあらゆる苦難に値する」というものだった。

「ねえカーラ、わたしずっとあなたと仲良くなりたと思っていたの」ティナはことばをつづけた。「だって、あなたはこんなにきれいで、頭もいいんですもの。でも自分でもわかっているんでしょ？」

カーラはちゃんとした返事を思いつかなかった。

ティナは両手で、カーラの腕をぎゅっとつかんだ。「ねえ私『おつとめ』をもう一冊もっているの。よかったら、あなたにあげるわ」

「いいえ」

「考えてみて」

「欲しくないから——」

「ほんとうに？」

「ほんとよ」カーラは思わず口を滑らせた。「あんなくだらない本、いらないわ」彼女は腕を振りほどいて急いで立ち去った。

ティナはカーラのうしろ姿をじっとみつめた。怒りはしだいに薄らぎ、なんともいいようのない微妙な感情に変わっていった。

カーラは首筋を焦がすような視線を感じ、最後のひとときを台無しにしたことを、ほんの少し恥ずかしく思った。だがその苦しみも一瞬だった。だって自分は礼儀正しくしていただけなのだ。なにもかもぶちこわしたのは、頭の悪いあの子のほうだもの。

『おつとめ』によれば、すべての女の夢はひとりの偉大な男に身をゆだねることだという。何度か抜粋を目にしたことがあり、それくらいは理解していた。このばかな古い本が不自然なまでに執拗に強調しているのは、聖なる少女が偉大な男を見つけ、彼と寝るためにあらゆる努力をするということだった。しかも男のからだを、千人ものほかの妻たちと共有しなければならないのだ。まともな歴史学者たちのあいだでは、『おつとめ』は神からの啓示でも、二流の天使からのお告げでもないということ意見が一致していた。この本は失われた時のどこかで書かれた欲求不満男の願望にすぎず、そんなものを読むのは男に寛大な女だけ、信じているのはばかだけだった。

カーラはひとりごとをつぶやきながら、早足で歩いていた。

サンダーはリッパーのそばで、新しく選ばれたネクストファーザーと愛想よくおしゃべりしていた。兄はたくましい若者になっていた。頑固で魅力的、それにとってもハンサムだった。たいていの面で、ほかのどの十六歳よりも賢かった。この世界から出て行くことについて話すこともあったが、ネクストファーザーに選ばれたらという前提での話だった。それが彼らの教会のやり方だった。ひとりの花婿にひとりの花嫁、そして投票でもっともふさわしいとされたカップルが、新しい植民地の指導者になるのだ。

「きょうはよき日だ」サンダーが歌うようにいった。「笑ってごらん」

カーラは兄を押しつけ、混雑した通路を抜けて、夕暮れの中に出て行った。

サンダーは座を外して妹のあとを追った。いつになっても兄として妹の気持ちが気になるし、守ってやりたいとも思っていた。妹にどうしたのかとたずねて、わけを聞いた。自分がいうべきことはすぐにわかった。「あの子は不器量な上にばかだ。それにおまえにとってはどうでもいいことだろう？」

そうだわ。私にとってどうでもいいことだわ。

「いいやっかい払いさ」兄は断言した。

だがその結果、もうひとつの世界が汚染されるのだ。カーラはそれを忘れることがで

きず、まして赦すことなどできなかつた。

結婚式は日が暮れるころに刈り込まれた春のフェスクの草地で行われた。地区の司祭——魅力的な老賢者——が神と信頼すべき天使たちに、この勇敢なよき者たちを見守ってくださるよう祈願した。それからうれしそうに、ほとんど軽薄な口調で、五十組の新婚夫婦にこれから築いていく世界で互いに愛し合うようにといった。「一夫一婦制を守りなさい。力を合わせてよい家族を育て、運命によって導かれたすばらしい世界を満たしなさい」

披露宴も同じ草地で催された。臨時の照明のもと、場の気分は祝賀から悲嘆へと移り、またもとにもどった。だれもがいつもよりたくさん飲んでいて、ようやく新婚夫婦たちは、ドーム型の建物の近くに設置された五十のちいさな小屋にひきとった。花婿は花嫁の白いドレスを脱がせ、新妻はドレスをたたんで、もうすぐ捨てていく生活の工芸品や小間物とともに、防水トランクにしまいこんだ。

そのあと小屋でなにが起こるのか、カーラは想像せずにいられなかつた。

少しワインを飲んだせいだからだがほてり、なんとなくいい気分だった。友だちや大人たちとおしゃべりして、数分間父の話に耳を傾けた。父はすっかり酔っぱらって、カーラは自慢の娘だなどといっていた。自分よりもずっと頭がいいし、母親よりもずっと美人だと。「おっと口が滑った。母さんには内緒だよ、カーラ」それから父はつづけた。おまえがどんな人生を生きていっても、自分がかまわない……いま笑っているように笑えるくらい幸せでいてくれるなら……。

カーラはそんな父を愛おしく思ったが、それが本気でないことはわかっていた。酔いが醒めれば、サンダーがお気に入り子どもだと彼女にわからせようとするだろう。とびきりの笑顔で、兄のすばらしい大志をほめそやし、孫たちは自分たちだけの世界で生きるのだとうらやむように語るだろう。

カーラはトイレに行きたくなって申座した。

草地を離れて暗闇の中を歩きながら、自分の人生を好きなように生きなさいという父のことばを考えていた。でも「自分の人生」って？ それは重たい問いかけだった。両親や教師や友人たちからの重圧というだけではない。カーラ自身が自分の将来についてなにもわからないことがいちばん問題だった。なんて頭がいいんだろう——だれもがそういつてくれた。でも自分の運命に関しては、手がかりさえつかめていないのだ。

櫛の林を歩いていたとき、カーラはうしろに人の気配を感じた。とくに怖いとは思わなかったが、足をとめるとすぐに、その足音もぴたっととまった。

カーラは肩越しに見ようとして、振りかえった。

突然、冷たくて黒い袋を頭からかぶせられ、ものすごい力で地面に押し倒された。そして男の——どこかで聞いたことのある——声が、袋に包まれた彼女の耳元でささやい

た。「抵抗したら殺すぞ。声をあげたらおまえの親も殺してやる」

カーラは感覚が麻痺し、脱力状態で動けなかった。

誘拐者はカーラを縛り上げ、黒い袋の上からロープで猿ぐつわをかませた。それから彼女を別の方角に引きずっていくと、金属製のドームの通用口の手前で立ちどまった。指がボタンを押し、蝶番がきしむ音が聞こえた。それから地面が鋼鉄に変わり、彼女の長い脚は開拓者たちの床を引きずられていった。

感覚が戻ってくると、激しい恐怖を感じた。

目が見えないまま、カーラは縛られた脚を振りあげて男の脚のあたりを蹴りつけた。男は笑ってひざまずき、恋人にささやくような声でいった。「きみとぼくのセックスはあとだ。きょうはティナの番だから、ごめんよ」

カーラはおがくずが詰まった木箱に縛りつけられた。その匂いで数百個のカメの卵だということがわかった。

通用口のドアが閉まると、カーラは結び目と格闘した。時間はあとどれくらいあるのだろう？ あと何時間？ パニックでものすごい力が出たが、いくら引っぱってもひねっても、結び目は固くなるばかりで、数分間も格闘すると疲れ果てて、ロープの猿ぐつわをかけられたまますすり泣いた。

だれもみつめてくれないだろう。

そして新しい世界に到着してから、ティナの夫は——コネと名声にめぐまれた大男だったが——カーラを見つけたふりをしてロープをほどき、ほかのみんなにいうだろう。

「見ろよ、こいつおれたちといっしょに来たかったんだぜ！ おれの妻の友だちなんだ」そしてカーラに反論するひまをあたえずに、こういうにちがいない。「おれたちの分から食べ物を分けることにしよう。そうだ、この子はぼくが面倒をみるんだ」

カーラは気を取り直して、もういちどロープと格闘した。

そのときまた耳障りな音を立てて通用口のドアが開き、だれかがカーラのおきを抜け、通路を行ったり来たりしてから、彼女のそばで一瞬立ちどまると、手首にナイフをあててぐいと引き、いましめを解いてくれた。

猿ぐつわがはずされ、黒い袋がとられた。

サンダーが片手に小さな懐中電灯を持ち、カーラの顔から首にそっと手を触れた。「だいたいどうぶか？」

カーラはうなずいた。

「運よくおもてであいつと鉢合わせしたんだ」兄は平静を装っていたが、その表情と声はぴんと張りつめていた。『『どうして花嫁といっしょにいないんだ？』ってきいたら、あいつなにもいわなかった。それでおかしいと思ったんだ』兄はちょっと間をおいて、つづけた。「あいつがおまえをじろじろ見ていたのに気づいていたんだよ、カーラ」

「そうなの？」

「気づかなかったのか？」サンダーは大きく息をつき、もう一度深呼吸して落ち着きをとりもどした。「だからあいつに、おまえがこっちに来るのを見かけなかったかってたずねたんだ。そうしたらあいつ『うせろ、ガキ』っていったんだ」

サンダーが脚のロープを切りはじめた。懐中電灯の光で、兄のお気に入りのポケットナイフが見えた——大きな刃はべたついて赤く、ぞっとするほど大量の血にまみれていることがわかった。

「殺したの？」カーラはささやいた。

ぞっとするようなささやき声で、サンダーはいった。「殺してはいない」

「どうしたの？」

「おまえを救っただけだ」

「でもあの男は？」

「男？」サンダーは死んだように静かな笑い声をあげた。「どうかな、カーラ、おまえのほう生物学には詳しいからね。でもあいつはもう男とはいえないと思う……そういえばわかるだろう……」

6

毎年春になると、カーラは自分だけの儀式として、『ファーストマザーのお話』を隠し場所から取り出し、最初から最後まで読んだ。そこに描かれている冒険と勇気ある行動に心を打たれ、悲劇にはいつも悲しい気持ちになった。全部を暗記しているにもかかわらず、いつもクレアの物語を初めて読むような気持ちになった。強く信念をもったクレアは、オーウェンの言動に目を光らせると同時に、女の子たちのためにできることはなんでもやった。重要な決定に関しては、大人全員が投票権をもつようにした。この投票の前には、当然彼女の意見が聞かれた。葬儀ではいつも、クレアが故人について語った。またこの世界への到着を記念する、ささやかな祭りをとりしきった。三年目の冬、厳しい飢饉があった。地球の作物があまりとれない中、土着のカメは乱獲で絶滅してしまった。残った食料を配給する仕組みをつくったのはクレアだった。六人の妻たちが最後の缶詰があった貯蔵庫に押し入ったところを見つけたとき、クレアは紛糾した裁判の裁判官をつとめた。六人は全員、腹を空かせた赤ん坊のためにしたことだと主張した。しかしそのときには数十人の子どもたちがいて、女たちの多くが妊娠していた。ほかの女の子たち十二人——妻も、妻でない者もいた——が、陪審員をつとめた。人類の歴史と同じくらい古いしきたり従って、陪審員たちは証言を聞き、自分たちだけで話し合い、被告全員に有罪の評決を下した。

寮母は六人の追放を命じるしかなかった。

最初のティナも罪人のひとりだった。激しい口論と空虚な脅しのあと、ティナとほか

の五人は幼い子どもたちを連れ、緑豊かな草地と食べ物があることを期待して、南へと向かった。

六人の怒れる妻たちは、間違いなく存在した。しかし彼女たちの罪についてはさまざまな説があり、どの聖書にもクレアが裁判官をつとめたとは書かれていなかった。わかっているのは、六人の女たちは荒野をさまよひ、十年後に戻ってきたときには、アオニワトリとカメの卵を持ち、そして生き残った四人の子どもたちといっしょだったということだけだった。茶色の目をしたかわいらしい男の子は、かなり大きくなっていて、父親に会いたがっていた。

じつのところ、おもだった教会はクレアが存在を認めておらず、彼女は存在しなかったも同然だった。ちいさな分派でさえ、歴史におけるクレアの役割を否定していた。『ファーストマザーのお話』によれば、クレアはさらに七年間生きて、眠っているときに安らかに亡くなった。オーウェンは、妻たちの聖書のひとつを借りて、クレアの墓前で祈りのことばを述べた。彼はずっと目の上のたんこぶだった者がいなくなったことにほっとして、彼女のよき行いと導きに感謝した。そして『ファーストマザーのお話』は、その著者の希望に満ちたことばで締めくくられていた。その著者とは、あの才媛のカーラだった。

ただし何事にも終わりはなく、その後に起きたことを考えれば、物語はまだはじまったばかりだった。

ほとんどの研究者によれば、開拓者たちの暮らしが楽になるのに百年以上の歳月がかかった。オーウェンは八十歳まで長生きし——最後まで生殖能力を保ち——自らの神に等しい地位を利用して、彼と寝たがる妊娠可能な孫娘たちとセックスしつづけた。クレアの墓はやがて失われたか、実在していなかったのかもしれない。しかしオーウェンが埋葬された場所は新世界初の史跡になった。石切場から石灰岩のブロックが運ばれてきて高く積み、記念碑は立派な彫像と称賛のことば、そして最初の壊れたリッパーで飾られた。参拝客は、偉大な男の像の足元にひざまずくために、何日も何週間もかけてやってきた。そしてときには、古傷が癒えたり絶え間ない絶望が消えたりといったことが起きて、ファーストマザーの力がふたたび証明された。

何世紀もたって、世界の人口はますます増えてゆき、そのうち一握りは科学者になった。

千年のあいだに、人類は温暖で酸素の少なくなった地球に広がり、つねに低地に暮らして、何の役にも立たない土着の種を滅ぼしていった。靴屋は工場になり、学校は大学になり、そしてゆっくりと、新しいリッパーをつくる途方もない技術が世界に戻ってきた。

一〇〇三年、ある裕福な若者がすべてのテレビ局のCM枠を買った。「リッパーが大きいほど、種はよくなる」彼は世界に宣言した。そして彼は、自分と千人の妻たちを新世

界に連れていってくれる、巨大なクラスAリッパーと広々とした家を紹介した。リッパーには、多様で生命力にあふれた世界をつくるために、優秀な男性たちの冷凍精子も積まれるということだった。

行きたいという若い女性はいくらでもいた。

その植民地と人びとがどうなったのかは、だれにもわからない。世界から出て行くということは、ことばのあらゆる意味で消えるということなのだ。にもかかわらず、つづく数世紀のあいだに、多数のリッパーがつくられた。無数の開拓者たちが、より豊かな空気、よりおいしい食べ物を求めて、最初の新世界から出て行った。移住がはじまってから六世紀がたち、最初のカーラの子孫たちはちいさなクラスBリッパーのまわりに集まり、聖書と妻たちの聖典から数節を読み、ともに未知の世界へとちいさいが偉大な一歩を踏み出した。

7

十九歳のとき、カーラは公園委員会に志願し、運と粘り強い努力のおかげで、子どものときに訪れた保護区に配置された。彼女はごついブーツとつばの広い帽子とぶかぶかの茶色の制服を支給され、制服の胸には見習いの札がピンで留められていた。最初の一週間は、保護区の動植物に関心がある観光客たちの見学ツアーをして過ごした。しかしその出来がいまひとつだったため、まもなく外来種絶滅部に移されたが、その部のほうが自分に合っていることがわかった。カーラは公用トラックで裏道を走り、決められた場所に車をとめて、歩いて森の中に入る。数日おきに、数百個の罠をチェックしなければならない。土着の動物は解放されたが、外来種はふつう空気を注射するか頭を殴るかして殺された。一日の終わりに本部に戻り、ビニールの手袋をして、さまざまな動物の死体を――ほとんどはふとったムクドリかふとったイエネズミだったが――焼却炉に投げこんだ。動物が罠の中で死んでいたら、死体は臭った。しかし虐殺にもすぐに慣れた。内心では、大切なストレスのたまる仕事をしていると思っていた。心の中では、前線に立つ兵士となって、ただひとり、なんの報酬も期待せずに、気高い戦いをしているつもりだった。報酬はわずかなお金とときおりの激励、そしてもちろん、毎朝荒野にもどって行って、消えていく運命の異質な自然の中でまた一日を過ごすことだった。

七月のある日、カーラが焼却炉のところで作業していると、もうひとりの見習いが現れた。以前には親しくことばを交わしたこともあった。しかし今日は、とくになんの原因もないのに、相手の男はいごこち悪そうだった。カーラを見ると、顔をこわばらせ、足どりが重くなり、彼女が怪訝な顔をしているのに気づいたのか、ふいに歩みを速めた。

「やあ」彼はかろうじて聞きとれる小声で言った。

カーラは死んだ猫を火の中に放り投げながら微笑んだ。「ねえ聞いた？ またハリー

ズ・ビッグ・デイの群れがみつかったんだって。セントメアリ氷河で」

若い男はほんの一瞬ためらった。それからあわてたような口調でいった。「用事があるんだ。またね」

ずっとむかしに、カーラは自分がほとんどの人ほど感情に敏感ではないことに気づいていた。いまではなにかがおかしいと感じることは、ほんとうになにかがおかしい可能性があった。どうしてあの男はおどおどしていたのだろうか？ わたしはまたトラブルに巻き込まれたのだろうか？ もしそうなら、今回はどんな失敗をやらかしたのだろうか？

ツアーをやっていたとき、不運な事件があった。グランドファーザーカルトに属するほら吹きが、ほかの観光客とともにツアーに参加したのである。彼の個人的使命はカーラの話に乗っ取ることだった。カーラはニセトウヒの特徴について話し、それなしではトゥームトゥームが生きていけないと説明していた。突然、そのほら吹きが口をはさんだ。いかにもばかにしたような口調で、土着の樹木は役に立たないだけでなく醜悪であり、土着の動物はみな愚鈍で、ここのようなみすぼらしい土地がすべて檜の林とコンクリートに変えられるまで、この世界は完成しないといった。

カーラの仕事にはある程度の忍耐が必要だった。ガイドをするときは公園の方針と一致しない意見をいってはいけないことになっていた。いつもは彼女も感情を抑えていた。三度も大声でじゃまをされたが我慢した。しかしそのほか野郎が、自分の十五人の息子たちと十二人のかわいい娘たちは、それぞれ新世界に行くことになっていると自慢したときに、カーラの堪忍袋の緒が切れた。年齢でもからだの大きさでも男の半分しかなかったが、カーラは男に近づいていって、その腹に指をつきたてた。「もしわたしがあなたの子もだったら、わたしだってこの世界を出て行きたくなるわ」

聴衆のほとんどはにやっとして、何人かは声を出して笑った。

しかしそのほら吹きは回れ右すると、つかつかと本部まで歩いていき、その日の終わりにまでに、カーラは野良猫やほかの害獣を殺す新しい仕事にまわされたのだった。

最後の死体がまだ燃えていたとき、上司が本部から出てきた。彼は年寄りだった——ずっと公務員で、定年まで平穩無事に勤め、その後は平穩な死を願うような人物だ。気難しい見習いのところに近づいてくると、彼はつらそうな微笑を浮かべ、二度も彼女の名前を呼んでから、ひどくいいにくそうに「話がある」といった。

頭のないムクドリが土の上に転がっていた。カーラはブーツで焼却炉の中にそれを蹴り入れ、重たい鉄製の扉を閉めた。それからこわばった声でいった。「先にわたしの話を聞いてください」

男は手前で立ちどまった。

「お願いします。なにをお聞きになったかわかりません。わたしがいつへまをしたのもわかりません。でもそれには深いわけがあるんです——」

「カーラ」

「だからまずわたしの説明を聞いてください」

哀れな老紳士は頭を下げ、悲しそうに首を振った。「カーラ。すまない。わたしがいいなかったのは……きみに伝えたかったのは……今朝お兄さんから電話があったということなんだ。きみが車で出発した直後だった」彼はそこでゆっくりと息をつぎ、それから知らせを伝えた。「きのうの夜、お父さんが亡くなったんだよ。ほんとうにお気の毒だが」

儉約家だけれど実際的ではない。父は死ぬときも生きていたときと同じだった。

無慈悲ないいかたかもしれないが、ほんとうのことだった。父は希望事項の長いリストを残していったのである。「棺はビヤクシンの木でつくった簡素なもの」「葬列はなし」といったことまで、母はすべて夫の希望どおりにした。墓石もごくちいさなものだった。火葬はお金がかかるので、病気になってすぐ買っておいた個人用の墓地をつかうように指示してあったが、病気のことではだれにも——三十一年間連れ添った妻にも——秘密にしていた。しかしその墓地には、周囲二百ヤードにまったく道が通っていないことをふくめ、いくつかの欠点があった。カーラの両親はもう何年も前からどこの教会にも行っていなかったの、ちりぢりになっていた家族があらゆることをしなければならなかった。その中には、墓を法律で決められた深さまで掘ることや、飾りのない棺を担ぐ人を手配すること、そして悲しい葬儀のあとで墓穴を埋めることもふくまれていた。

「なかなかいい場所だ」サンダーがそういうのは、これが初めてではなかった。それから彼は灰色の土を落とし、しっかり閉じられた赤い厚板に土がばらばらと落ちるのを見守った。大きな塊はごつごつと音をたて、ちいさな塊はばらばらと転がったり穴の底に落ちたりして、すばしっこいネズミが走っているような音をたてた。

「いいところだね」四十脚の折りたたみ椅子のひとつにすわった母もいった。

ほかの人びとはもう去っていた。葬儀に参列したのは親戚と友人三十人あまりで、故人のことをよく知っていたのは、そのうちの半分くらいだろう。父が死んだのが十年前だったら、この低い尾根に二百人の人びとが集まって、椅子にすわれない人は立っていたはずだ。それに教会だって少なくともふたりの司祭を寄越していただろう。ひとりには聖句を読み、もうひとりには嘆き悲しむ家族のそばにすわって、得意の慰めを与えていただろう。しかし慰めを与えるはずの人間は、あの恐ろしい結婚式の夜の直後に一家を見捨てた。花婿のひとり去勢したサンダーは、人びとから爪弾きにされた。カーラと両親がそれに同調しないとわかると、信徒たちはもっと狡猾で卑劣なやり方で彼らを見捨てたのである。

何か月間も、カーラはひそかに旧友たちと会いつづけた。彼女たちは少しばかり勢いこんで、あなたはなにも悪くないとってくれた。でもそのあとで、どうしてあんなひどいことをした人間といっしょにいられるのかとたずねるのだった。なんといってもサ

ンダーは、信徒の中でも指導的立場にあった人間を去勢してしまったのである——あれはまったくの暴力行為であり、たとえ警察沙汰にならなくても、許しがたい邪悪なふるまいだった。ふつうなら気高い行為とされる、兄がたったひとりの妹を守っただけだということは無視された。そしてまた、まともな男ならつねに自分の女たちを守るものだというこも、もし十四歳の娘が誘拐されたら、その家族はそんな変態野郎どもに「娘を誘拐したら、おまえの将来の子孫たちを誘拐してやる」という警告を送るべきだということも、まったく無視された。

カーラの友だちも、そういったことは一切無視した。カーラが兄のしてくれたことに感謝しているといったとたん、彼女たちは内緒で会う口実を探すのをやめた。

もちろん、非難されたのは兄だけではなかった。親というものはつねに、子どものしたことで非難されて当然である。サンダーの父親と母親は、遺伝子と自分たちの夢を息子に与えたのではなかったか？ 犯罪をおかしたとき彼は厳密に言えばまだ子どもで、まだ親のものであり、はじめに神に、それから両親に仕えなければならなかった。そうではないのだろうか？

誘拐は不幸なできごとだったという者もいた。新郎はあんなことをすべきではなかった、それも自分と同じ教会に通う者に対して。だが一夫一婦制を大切にする教派でも、彼の行いは無理からぬこととみなされた。二万年の歴史がこのきわめてありふれた態度をつくりあげてきたのである。ある助祭が——魅力も常識もない若い男だったが——金曜日のミサのあとで彼らを訪ねてきた。カーラの父と応接室にすわっていた助祭はいった。「どこが違うんですか？ 若者がふたりの花嫁を新しい世界に連れていくのも、男が最初の妻と二十年間すごしたあとでさっさと離婚して、若い女と新たな家庭をはじめるのも同じことでしょう」

「大間違いだ」父が声を荒げ、その声にはカーラがめったに聞いたことのない怒りがこもっていた。カーラは二階の自分の部屋で、もうひとりの擁護者である父がこういうのを聞いた。「まず第一に、わたしの娘はまだ少女だ。そして二番目に、あの子には選択の余地がなかった。まったくだ。アオニワトリのように縛り上げられ、荷物のように乱暴に扱われ、二度と自分の家族やこの世界を見ることのできない状況に放りこまれたんだ。それは正しいことなのか？ もっともなことか？ まともなことか？ 答えは否、否、否だ」

「しかし花婿をあのように切るのは——」

「ちいさな切り傷だと聞いている」

カーラはどちらに驚くべきかわからなかった。父が相手の話を遮ったことか、それとも男のペニスを侮辱したことか。

助祭はうめき声をあげた。「あの邪悪なけだものは……あなたの息子のサンダーは……数年間刑務所に入るべきでしょう」

「それは裁判所が決めることだ」

「もちろんおわかりでしょうが」客は一瞬ためらってから、ことばをつづけた。「まともな開拓者の集団はどこも彼を受け入れないでしょう。いまとなつては。あんな暴力を好む性格では、受け入れないでしょう」

「そうだろうな」

「残念だ。あなたの息子はむかしからファーザーになりたがっていたのだから」

カーラの父は沈黙したままだった。父の顔を想像すると、そこにはまったくの屈辱の表情が浮かんでいた。

それから愚かな助祭は、最後にもうひとつ意見を述べた。悪意に満ちた声で彼はいった。「わたしがおじゃましたのにはひとつ理由があります。人々がどんなことをいっているか、あなたも知っておくべきだと思って」

「だれが？」

「男も女も」

「聞かせてくれ」

「あの子は十四歳よりも大人びて見えます。からだは成長しているし、声だってもう大人の女の声です。しかしカーラのことばづかいには問題があります……あの生意気な、辛辣な口調は……」

「いったいなにをいいたいんだ？」

「わたしたちの多くは……あなたの親友たちは……だれかがあなたの娘の高慢の鼻をへし折ってやったほうがいいと考えています。そして赤ん坊も産ませてやれば、いい遊び相手になるだろうと」

父の椅子が軋んだ——挑発的な硬い音だった。

「出て行け。わたしの家から出て行け」

「よろこんで」助祭はいった。「だがその前に、私の意見を聞いてよく考えることですね。あなたの娘はあの夜チャンスを手にしていました。それは公平なことにも正当なことにも見えないかも知れません。しかしあの子とあの子の兄に少しでも分別があれば、いまごろはよりよい世界で暮らしていたでしょう。しかしいまとなつては、まともなグループはどこも、あの子のような厄介者を引き受けないでしょう。将来望みがあるとすれば、あの子のことを知らない独身男にこっそり誘拐してもらうことだけです」

一瞬の間——荒い呼吸と激しい怒り。このときカーラは人生でただ一度、父があのことばを口にするのを聞いた。「くそつたれ」

あの瞬間と、悪夢のようなできごとのすべてが……墓地にいるカーラの脳裏に蘇った。あいだにはさまった年月がふいになくなって、苦痛と惨めな思いに痩せたからだが震えた。サンダーも母もそれに気づいた。ふたりはカーラが土くれを穴に投げ入れるようすを見て、すっかり誤解してしまった。「競争じゃないのよ、カーラ」と母がいった。

カーラはなにかひどいことをして捕まったような気がした。罪状はわからなかったが、ひどい罪悪感をおぼえた。シャベルがすべり落ちて、彼女は途中まで埋めもどされた墓にひざまずき、父の棺のまだ見えているふたつの角をみつめた。

サンダーがそばにきた。

カーラは一気に吐き出すように、思いのすべてを打ち明けた。一夜で自分たちの人生はめちゃくちゃになり、いくら自分は悪くないと思っても、罪悪感をおぼえる。あれ以来ずっと悪いことや不運なことつづきなのも自分のせいだ。自分のせいで家族は教会も友人も失った。父さんは若死にし、母さんはこれからずっと未亡人として生きていかなければならない。その一方で、兄さんは前科者になってしまい、どこか新しい世界で立派なファーザーになるという、人生の最大の夢を奪われてしまったのだ。

気まずい沈黙のあと、母がいった。「『さようなら』もいえずにあなたがいなくなっていたら、そのほうが辛くてたまらなかったでしょうね」

カーラはもっとなにかいってほしかった。

「ばかなことをいわないの」でもいい。「あなたはなんにも悪くないわ」だったら完璧だっただろう。

しかし老いた母はこういうだけだった。「ここ数年は大変だったわ。でも父さんの病気はあなたのせいじゃないのよ」

サンダーはカーラのうしろの土の山にシャベルを突き立てた。それから深いため息をついて、こういった。「それにおれのことは心配いらぬ。うまくやっているから」

それは嘘だった。刑務所に入ったせいで、兄は学校を卒業できなかった。かつての少年は自分で彫った入れ墨と運動選手ふたり分の筋肉をもつ精悍な若者になっていた。

カーラは信じられなかった。

「嘘よ」首をふりながら、彼女はいった。

サンダーはそんな妹を笑い、一、二度墓穴に土くれを蹴り入ると、父を見下ろして静かにいった。「『立派』なんてただのことばにすぎない」その表情は堅く、その目は大きく見開かれていて、乾いた冷静な声で、彼はゆっくりとつけくわえた。「それに別の世界に行く方法はひとつとはかぎらない」

8

カーラの世界は小規模および中規模の教会の同盟によって植民された。二百万人の信者たちが資金を出し合って、強力なクラスAリッパー——都市の数ブロックを動かす力をもつ化け物——を購入したのである。それぞれの教会が開拓者たちを選び、投票でその長に選ばれたラストファーザーが、千人以上の勇敢な人々と、三人の密航者と、そして出発前夜に誘拐された若い女性少なくとも十五人の幸福に責任をもつことになった。

アジア大陸の、かつて湖南と呼ばれていた地方の農地が選ばれた。ふだんは小麦やリードフルーツが作られている土地に、巨大な多層ドームが建造された。開拓者たちは全員、発泡ラバーとワックスで耳栓をした。巨大なリッパーは建物全体を揺らしながら無限の宇宙を探索し、最後のサージとともに機械と人間を隠された次元に沿って引きずっていき、微細な距離を移動したのである。

リッパーのパワーには制限がないが、実用に際して考慮すべきことがあった。別の世界へ侵入するときには、その世界の空気と土地を押しよけることになるのだ。そのクラスAリッパーは、到着と同時に何千トンもの土と岩を押しよけ、衝撃によって瞬間的に熱せられた粉砕物の環状の丘を形作った。木や泥炭は燃えだし、地下深くでは岩盤が圧縮され、高温になって溶け出した。ラストファーザーの命令で、全員その日は屋内に留まり、ボンベに詰めた空気を呼吸し、火が燃え広がって夕方の雷雨で消えるのを見守った。それから調査チームが派遣された。彼らは焦げた地面を走り回り、スゲに似た黒い草の草原を見つけ、そこで土着のネズミと、昆虫に似て非なる擬昆虫と、そしてもっとも古い教科書に出ている絶滅した猿に一見よく似た四肢の柔軟な生物をみつけた。

経験から、新しい世界に知的生命体が進化しているとすれば、それはアジアに住んでいる可能性が高いことがわかっていた。競争がもっとも激しいのは大きな陸塊である。オリジナルの地球でもそうだった。オーストラリアにはかつてオポッサムやカンガルーがいた。次元を渡ってやってきた開拓者たちがそこに留まっていたら、地平線の向こうにはほかの大陸があり、知能が高く攻撃的な有胎盤類がたくさんいることに気づかなかっただろう。しかもその中には、例外的に並はずれた計画力のある獰猛な中型の猿もふくまれていた。

しかし調査チームが持ちかえった害獣の脳は単純でしわが少なかった。猿のような生き物は、ふつうの猫程度の知能しかないとわかった。ラストファーザーは、まず助言者と、つづいて愛する妻たちと話し合いをもち、しかるべき熟慮と祈りの期間ののちに、この先ずっとこの地に留まることが神の思し召しだと宣言した。

新しい植民地は人口も面積も急速に拡大した。

ラストファーザーは名誉ある死を迎え、その遺体は九人の子どものうちの六人によって、到着の地につくられた大聖堂に運びこまれた。

そのころには何千マイルもの荒野に村落やちいさな都市が散在していた。さらに十世代がたち、石炭を燃料とする船が、太母洋のあらゆる海岸線を測量した。少人数のグループは内陸に進み、チベット高原を迂回して、かつてペルシャやトルコ、レバノンやフランスと呼ばれていた土地に到達した。

もともとあったいくつかの教会は、成長して分裂するか、衰えて消滅した。

そしてつねに新しい宗教があらわれたが、その大部分はひとりの信者の理想やそのきわめて開かれた幻想から生まれた。

オリジナルのクラスAリッパーはラストファーマーの大聖堂の祭壇にされた。幹部技術者たちがその機能を保ち、千人の精鋭兵が聖地を警護した。それはこの世界が無数の新たな領域への出発点でありつづけるという、あからさまで断固とした意志を象徴していた。人類のつとめはより多くのリッパーをつくること——その約束は結局数世紀前に実現した。カーラの時代には、千人の開拓者たちが五十億人にまで増えていた。税制や社会慣習は、リッパーがつねにつくられることを保証していた。専門家はこの温暖な土地に百五十億人の人間が住めるだろうと予想していた。そして幸運と神の恵みがあれば、そのころまでには十分な数の工場が十分な数のリッパーを製造し、余剰の人口すべてを送り出せるようになっているだろう。男の子はみな自分だけのだれもない黄金の領域を発見し、女の子はみなよい夫の幸せな妻になることができるのだ。

9

サンダーは妹のひとり旅をひどく嫌がった。カーラがどこかに行くときにはかならず、電話もしくは直接会って、難しい会話をしなくてはならなかった。ハイウェイはひじょうに危険な場所だということを妹に思い出させるのが彼のつとめだった。サンダーはいつも、あらゆる用心をしたにも関わらず、不幸に見舞われた若い女性の話をした。彼女たちは運転するのは昼間だけにして、見知らぬ人間とはなるべく関わり合いにならず、ひとり旅の女性専用の安全なホテルに泊まった。しかしそうした賢い女性たちでさえ、例外なく旅行中に行方不明になった。そして何の手がかりもなかった。

「でも実際の数値を考えて」カーラはいつもそう反論した。「一生のうちに二回も誘拐される確率は……」

「小さい。それはわかっている」

「交通事故で死ぬ確率のほうが十倍も高いのよ」

しかし最終的にサンダーは同じ統計を分析して、より恐ろしい事実で彼女を迎撃するのだった。「交通事故で死ぬ確率は三倍だ。しかしそれは女性全員の場合だ。老若を問わない場合だ。おまえの部分集合にあてはまる——二十代で美しく、ひとりで旅をしている——女性は、ごくふつうの交通事故で死ぬより行方不明になる確率のほうが五倍も高い」

「でも行かなければならないの」カーラの博士論文のテーマは、遠く離れた十数か所の山頂にある原生地域の研究だった。車での移動は不可欠で、ただでさえ予算に余裕がない現状では、信頼できるガードマンを雇うお金はなかった。「兄さんがわたしの研究を評価していないのはわかっているけど——」

「そんなことをいったおぼえはない」

「それは兄さんがとっても礼儀正しい人間だからよ」カーラは自分のジョークに笑って、

ことばをつづけた。「私はいつも登録済みの武器を持つようにしているわ」

「よし」

「それに登録していない銃もね」

「当然そうすべきだ」サンダーは断言した。

「それに、細かい用心を何千も実行しているし、危険なことは何百万も避けているわ」カーラはいつも、見えない敵にまさっていることを証明するために、ひとつかふたつ新しい手を考えていた。「それにもし兄さんがほかにも提案があるなら……どうかかよわい妹に教えてちょうだい……」

「とぼけるんじゃない」サンダーは釘を刺した。「おまえは男が女に何を求めているかわかっていないんだ。もしわかっていたら、家から一步も出ないだろう」

カーラは女性専用フロアにある、こぢんまりしたアパートメントで暮らしていた。女性専用フロアは地上十階——いちばん大型のリッパーでなければ連れ去ることのできない高さだ。サンダーはたまたま立ち寄ったのだが、機械工の仕事を探しているといっていたわりには、急いで出ていく様子ではなかった。カーラの考えでは、兄の最大の使命は妹をこわがらせることだった。サンダーはいつもどおり、ニュース記事の切り抜きとウェブサイトを見せて彼女を怖がらせた。彼女が行こうとしている山には欲求不満の男がうようよしていて、どいつも負けず劣らず危険なやつで、その全員が新しい世界をはじめめるチャンスを狙っているというのだ。じっさいに先週、武装したコンボイから積荷のクラスCリッパーがごっそり奪われ、チルドレン・オブ・フォーエヴァーと称する連中が豊かな時代を宣言していた。そしてついきのうのことだが、ニューエターナルの郊外で、どこかのばか者が大型貨物トラックを運転して二か所の鉄の門を破り、女学校の教室棟のそばに車をとめた。大型のクラスBリッパーが作動し、あとに残ったのは半球型の穴と建物の残骸、そして怯えた十代の少女たち千人だった。女の子たちは校医による衛生教育のために講堂に集まっていたおかげで難を逃れたのである。

カーラは悪いニュースに肩をすくめた。「ばかはいつだっているわ。なにも変わらないけど。わたしはだいじょうぶよ」

でもほんとうは、車で長距離を移動するのに不安がないわけではなかった。最近のニュースを聞けばなおさらだ。百台近くのリッパーが盗まれ、大陸のどこかにあるということは、自分がトラブルに巻きこまれる可能性も高まったということだった。カーラは恐怖を素直に受け入れた。すると、とんでもない名案がひらめいて、カーラは思わず解決策を口走っていた。

「いっしょに来て」

サンダーは一瞬あつけにとられた。

「そんなにわたしのことが心配なら、わたしといっしょに車に乗って仕事を手伝って。もし機械工の仕事が急ぎでなければ」

「いいだろう」サンダーは答えた。「そうするよ」

「家族の長期休暇ね」カーラは微笑んでいった。

サンダーは彼女のいわんとすることを察して、つけくわえた。「むかしのように」

ふたりがいっしょに暮らしていたときから十年以上の歳月がたっていた。ひと夏の旅には、これまでの埋め合わせをする機会がいくらでもあった。しかし何日間も車を走らせ、数週間は高山の山道を歩いたり調べたりして過ごしたにもかかわらず、ふたりは驚くほど話をしなかった。サンダーは、刑務所での暮らしについてはまったく、刑務所を出てからなにをしてきたのかについてもほとんど話してくれなかった。おなじようにカーラも、いままでつきあった男の子のことや、これからつきあいたいと思う男性のこと——親しい友だちには詳しく話しているような恋愛話——を兄に話す必要を感じなかった。ときどき、沈黙が気まずいときもあった。しかし兄弟姉妹というものは、かえって親しくなっていくものだ。おなじ遺伝子と家族をもっているということは、あまりに深く大きな絆だから、ふつうのやり方で親しさを証明する必要がないからだ。サンダーは、ちょっとしたことばや身振りで自分自身を垣間見せるだけだった。きっと自分も、やり方は違っても、おなじくらいうち解けがたく見えているのだろう。でももちろん、そうした秘密は問題ではなかった。このひとはいつまでたってもわたしの兄で、そのことは、大陸の背骨に沿って車で走りながらつくるとんな関係にも増して大切な絆だった。

サンダーは保護者としての仕事を楽しんだ。車をとめるたびに用心深くて少しばかり攻撃的になった。出会う人たち全員の顔をすばやく観察し、必要とあれば鋭い視線でらみつけた。カーラは兄が相手を威嚇する空気を自在に操るのに感心した。意外なことに、サンダーが店のカウンターに近寄って店員を怯えさせるのを見ているのは楽しかった。刺青をくねらせながら顔を石のようにこわばらせ、「どうも」というときの、あるいは見知らぬ人に「悪いが通してくれないか」というときの、ぶっきらぼうなうなり声が好きだった。

どちらかといえば、一般道路より荒野のほうが問題だった。サンダーは疑心暗鬼とまではないわなまでも、ますます用心深くなった。

カーラの研究は擬昆虫の名もない属に関するものだった。まだ知られていない虫たちを絶滅してしまう前にみつけだして分類し、その生息地のデータを集め、標本を凍結乾燥して長い試験管に入れるのである。七月のある夜、南の巨大火山の山腹で、ビヤクシンの茂みの陰から妙な音が聞こえてきた。粗野な騒ぎ声のような音だった。「なにかしら」カーラは言った。サンダーはすぐに焚き火から離れ、周囲を少なくとも二回巡回してからもどってきた。片手に懐中電灯、もう片方の手には暗視スコープつきの、懐中電灯より長い銃をもっていた。「なんだったの？」

「若い男たちだ。近くでキャンプしようとしていた」

「そうなの？」

「ああ」サンダーはまた火のそばに腰を下ろしながらいった。「だがどういうわけか、テントをたたんで移動することにしたらしい。理由は分らない」

こんなとき、カーラはほんとうにうれしくなった。

だがあとになって、吐き気がするほど嫌な気分になった。自分はいったいなにさまだろう？ 自分では自立した独立独歩の人間だと思っているが、いっぽうでは、力強くて危険な男に守られることをよろこんでいるなんて。

二日後、ふたりが北へ向かっているとき、サンダーはグランドキャニオンに行ったことがないといいた。「あのときはそこまで行かなかっただろう」サンダーは彼女に思い出させた。「その後は行くひまもなかったし」

カーラは丸一日を観光にあてることにした。

峡谷の正確な位置や外観は、その世界によって異なっていた。だがどの世界でも、川は大陸のその場所を流れ、山は予想される地殻変動のせいで隆起していた。カーラたちの地球はほかより水分が多かったので、大きくて速い川が十億年分の地層を削り、峡谷の底を流れていた。カーラが谷底に下りるケーブルカーの料金を払った。昼食にはアオニワトリのゆで卵とマルベリーを食べた。それから岩だらけの川岸を歩き、カーラはヘレントラウトの腐った死骸を指さした。ファーストファーザーは生きた魚を連れてこなかったが、その後のファーザーたちは魚の養殖によって安価なタンパク質が得られることに気づいた。ヘレントラウトは五番目の新世界の生き物だった——雑食性で、外洋でも淡水でも生育可能であり、氷点下からぬるま湯までどんな温度でも元気だった。世界中のおもな排水路にはつねにその姿が見られた。「妊娠すると死ぬの」カーラは説明した。「幼生は母親を食料として利用し、腐っていく母親の死骸を食べて、泳ぎ出す前に差をつけるのよ」

サンダーは興味をひかれたようだった。だが考えてみれば、彼はいつだって周囲に注意を払っていた。このときは軽くなずき、しばらく間をおいてからいった。「どうしても知りたいんだが、カーラ、おまえはなにをしようとしているんだ？ つまり、その研究でということだが」

サンダーは数日おきに、まるで初めてそうするように、その質問をするのだった。

最初カーラは、兄が自分の答えを聞いていなかったのだと思った。しかしあとになって、もしかしたら兄は彼女の本心を引きだし、彼女が人生をかけていることが無意味だと認めさせようとしているのかもしれないと思うようになった。しかし数週間この質問に答えているうちに、カーラはそういう問答を楽しみはじめていた。毎回同じ答えでは飽きてしまうから、答えを変えなくてはならなかった。峡谷の底で、死んだ魚をみつめながら、彼女は義務だとか、数種の無名な昆虫を救うことによって得られる名誉だとかにまつわる常套句で時間をむだにできなかった。おそらく彼女の研究からは決して現れる

ことのないすぐれた薬の話題も避けた。その代わりに、大きく膨れた胴体を見つめながら、新しい答えを返した。

「わたしたちのこの世界は死につつあるの、サンダー」

そのことばに兄は彼女をじっとみつめ、解説不能な微笑を浮かべた。「どうしてなんだ？」ごうごうという水音のなかで、兄はたずねた。

「健康な地球には、数え方にもよるけど、一千万、二千万、または五千万の異なる種が生息しているの」カーラは首を振った。「ラストファーザーはできるだけ多くの種を連れてきたわ。そして一千種近くの多細胞生物が生き残ったわ。でもそれでは、永続する健全な生態系をつくるには少なすぎるの」

サンダーは肩をすくめて、遠くの空を指し示した。「おれには十分順調そうに見えるが。死につつあるっていうのは、どういう意味なんだい？」

「コンピュータのモデルがその可能性を指摘しているの」カーラは説明した。「乏しい多様性は脆弱な生態系を意味して、問題はただ種の数が少ないということだけじゃないの。種の性質も問題なの。わたしたちは新しい世界に行くとき、強靱な外来種をもちこんでしまうわ。生物学的には殺し屋よ。それも最初の地球のものだけでなく、十七もの異なる進化の歴史をもつ地球のものまで。互いにほとんどまったく異質な十七の系統。それだと意味のある相互作用は減る一方なの。それもまた、なぜこの世界の生態系が崩壊するかの変因のひとつなの」

「わかった。で、それはいつ？」

カーラは肩をすくめた。

「来年？」

「何千年も先でしょうね」カーラは認めた。「でもどこかに崩壊点があって、それを越えたらこの生物圏の基盤は急速に衰退するわ。たとえば植物プランクトンよ。この地球の固有種は新しい食物連鎖に適応しきれていないわ。もしそれが絶滅したら、酸素をつくり出すものがなくなってしまう」

「木も酸素をつくるんじゃないか？」

「つくるけど。でも木は燃えたり腐ったりする。そして化学的にいえば、腐ることは燃えることと同じなのよ」

サンダーは灰色の母魚をじっとみつめた。

「リッパーのスイッチを入れるとどうなるか知っている？」カーラはたずねた。「生息できる大気のある世界を機械が必死に探さなければならないことを知っている？」

兄はうなずいた。薄茶色の目にはすでに予感が宿っていた。

「どうしてそれほど多くの地球がわたしたちに適した空気を持たないのか考えたことがあって？」カーラは兄の肩をぽんぽんと叩いた。「もしもたくさんの開拓者たちが多元宇宙を移動していたとしたら？ 人間も、人間じゃないものたちも。そしてもしもこれら

恐れを知らぬ開拓者たちのほとんどが、最終的に彼らの世界の平衡を乱して、その結果破滅させていたとしたら？」

「ああ」サンダーはいった。

そして長いあいだ考えこんでからいいそえた。「なるほど」

その後サンダーがカーラの研究の重要性に疑念を差しはさむことは二度となかった。

10

リッパーの心臓部には、ダイヤモンドのウィスカーを編み上げた帽子の形をした容器がある。おのおののウィスカーには希土類元素が混入され、局所ブレイン世界に穴を開けるのに十分なエネルギーが注入されている。容器をつくるのは難しいが、その働きを維持、コントロールする機械を設計するのはずっと難しかった。ハードドライブとコンデンサは理論的限界値ぎりぎりでは動かさなくてはならなかった。熱と量子のゆらぎを最低限に抑える必要もあった。もっとも優れたリッパーは独特のアイソトープ混合物をつかい、信頼性は倍、コストは三倍になり、セキュリティコストを加えた最終価格はさらに四割増しになった。

カーラと兄は、その夏二度ほど、完成品のリッパーを長距離輸送するコンボイを見かけた。装甲したトラックはエメラルドグリーンに塗られ、それぞれのトラックには、武器を構えた強面の若者が乗った高速車が二台か三台護衛についていた。輸送ルートとスケジュールは秘密にされているはずだった。小型リッパーでも大変な価値があるので、企業は自らの投資を守るためならなんでもした。カーラは不思議に思った。チルドレン・オブ・フォーエヴァーの連中はどうやってコンボイが通過する場所を知ったのだろうか？それにリッパーを奪うのに、どんな武器をつかったのだろうか？

サンダーが運転していたときに、コンボイのひとつにでくわしたことがあった。いかつい顔をした男たちが乗った武装した小型スポーツカーが、突然反対車線に出て、カーラたちの車を追い越した。「寄せろ」乗っていた全員が叫んだ。「路肩に寄せろ」

そこはモルモン海沿いのハイウェイで、美しい景色と、ないに等しいほどせまい路肩で有名だった。しかしサンダーは命令に従い、せまいアスファルトに車を寄せると、エンジンを切ってハンドブレーキを引き、振り向いてカーヴのあたりをみつめた。彼は目を見開き、下唇をぎゅっと噛みしめていた。

少しのあいだ、カーラは明るい色をした内海を眺め、地平線までつづく輝きに心を奪われていた。そのとき大きなエンジンの轟音が聞こえてきて、まず二台の大型貨物トラックが通過し、それからもっと恐ろしげな車が数台つづき、最後にまた二台のトラックが通過していった。

「クラスCだ」サンダーは断言した。「約百台。ハイボーン製だ」

トラックにははっきりとした表示はなにもなかった。「どうしてわかるの？」
「警備が薄い。クラスCのリッパーはそれほど高く売れないんだ。盗賊が大金を稼げるのはAかBだ。トラックの側面にはコードが書かれているから、読み方さえ知っていれば、それで会社がわかる」

コンボイは見えなくなったが、ふたりはせまい路肩に車をとめたままだった。「いつ出発するの？」

「待て」サンダーがいった。

カーラはすわったままからだを動かし、二度ほど深呼吸した。

その意味に気づいて、サンダーはカーラをみつめた。「あまり近づかないほうがいい。だれかがよからぬ考えをもつかもしれない。わかるだろ？」

それだけいうと、勇敢でほとんど恐怖を知らない兄は、ハンドルをぎゅっと握りしめて、路肩にすわりつづけていた。

「兄さんはだれかによからぬ考えを吹き込んだのね」

「何だって？」

「兄さん。いままでに何回、コンボイのあとをつけたことがあるの？」

兄の表情は少しも変わらなかった。それからふいに、唇の端にかすかな笑みを浮かべて、秘密めいた静かな声で、兄は認めた。「五十回、いや六十回かな」

カーラは驚かなかったが、自分がそんなに動揺するとは予想していなかった。「そんなに欲しいものなの？ フェアザーになるためなら……そのチャンスのためなら、リッパーを盗むことも辞さないの……？」

サンダーはうなずきかけた。それから思いなおしてカーラをみつめた。「こうしてまだここにいるだろう。だからそれほど欲しくなかったんだと思う」

「なにがうまくいかなかったの？ あまりにも危険すぎたの？」

兄は傷ついたような表情を浮かべた。背筋を伸ばし、エンジンをかけて車を出すと、しだいに速度を増し、しばらく黙ってカーラが落ち着くのを待ってから、ようやく口を開いた。「この前話したコンボイには三十二人のガードマンがついていた。チルドレン・オブ・フォーエヴァーに襲われたやつだ。それに十二人の運転手と会社の代表が三人いた。そして彼らは全員殺された」

「知っているわ——」

「犠牲者のほぼ全員が道路脇の溝に寝るように命じられ、頭を撃ち抜かれた。通りがかりの車が死体に気づかないように」サンダーはハンドルが軋むほどぎゅっと握りしめ、それからとても注意深く、彼はカーラにいった。「あれを欲しがるとをやめたのはそのときだ。もっともすばらしい世界のフェアザーになるためであっても、お金をかせいで家族を養おうとしている少年を、たとえひとりだって殺していいはずがない」

一対の山脈の尾根がつらなっていて、モルモン海の沖合に島を形づくっていた。ふたりは数日かけて尾根伝いに歩いた。それからまた北に向かい、ガイザーズまで移動してから、火山地帯の北にある山脈をゆっくりと歩いて回った。その頃には八月終わりになっていて、ふたりは帰路に就き、カーラの家の方角に向かった。最後の目的地は、感傷的な理由でわざと残してあったのだ。

「わたしたちの最高の夏休み」カーラはつぶやいた。

サンダーも同意し、無言でちいさくウインクした。

ふたりは保護区の従業員用キャンプ場に泊まり、カーラは、かつて自分が働いていたときからいる古株のレンジャーたちに兄を紹介した。全体的に和気藹々とした雰囲気だった。元同僚たちはカーラの研究に興味を示し、鋭い質問をしたり、アドバイスをくれたりした。

ひとりの年配の紳士は——以前はカーラにそれほど好意的ではなかったのだが——カーラが自分の研究について話すのを、うなずきながら聞いていた。それから彼はいった。

「カーラ」それは、まるで父親のような優しい口調だった。「まさにそのような昆虫がいる場所を知っている。種の名前まではわからないが、きみがみつけたやつとはまったくちがうと思う」

「ほんとうに？ どこですか？」

彼は地図を取り出し、分水嶺の向こう側にある細長い谷を指さした。「標高が低すぎるように思われるかもしれない。それにビャクシンの木がかなり入りこんでいる。だがこの大きな弧を描く道をのぼっていくと——」

サンダーがもっとよく見るために割りこんできた。

「ちいさな谷があるだろう。そこでその青い昆虫を見たことがあるんだ。まちがない」

「ありがとうございます」カーラは礼を言った。

「手伝えることがあったら行ってくれ」老レンジャーはいった。それから慣れた手つきで地図を巻いた。「わたしが連れて行ってあげてもいい。お兄さんがここに残って少し休みたければ」

サンダーがいった。「いや、せっかくだが」

しかし彼にしては珍しく丁寧な口調だった。このときはまだふたりとも、なにが起ころうとしているかわかっていなかった。

ことばどおり、ビャクシンの木が土着の樹木のあいだにちらほら混じっていた。リリィバードやムクドリが保護区の外でビャクシンの実を食べたのだろう。発芽過程には鳥の腐食性の胃酸が不可欠だから、鳥たちが糞をしたところはどこでも、厄介なほど執拗

に、醜いくすんだ灰緑色の樹木の新たな森が芽を出した。ほとんどの生物学者はこれを種間の生得的な相利関係だと考えている。しかしカーラの見方は違った。鳥は自分たちがなにをしているかよくわかっているのだ。ムクドリは糞をするとき、「ここに森をつくりましょう。ばかな古い木のみなさん、わたしはあなたの死に神よ」と世界に歌っているのだ。

サンダーはしゃがみこんで、太い指を針状の落ち葉にさし入れ、細長いピンク色の虫をつまみ上げた。夏中カーラのすることを見ていたから、いまでは擬昆虫のある属に関していっばしの専門家になっていた。「あまり見込みはなさそうだな」

ミミズもまた人間の世界からの侵入者だった。そしてカーラが探しているような夜行性のゼンチュウは、ふつうミミズとは共存しないのである。

「もっと高いところかもしれない」サンダーがいった。

しかし老レンジャーはここだといったのだ。ということは、彼女のターゲットはミミズやビャクシンにもかかわらずもちこたえているのだ。それはカーラが少しでも長く固守したいと思っている英雄のイメージだった。

「先に行つて」カーラはいった。「もしなにもみつからなかったら、追いかけるから」

サンダーはウインクして暗い影の中に消えていった。

二十分後、カーラは探すのをあきらめた。森の中のちいさな空き地に出ると、岩のベンチに腰を下ろし、ナップサックからサンドイッチを取り出してひと口食べるのとほとんど同時に、背後の小道から見知らぬ人間が現れた。

「すみません」

カーラはびっくりしてさっと振り返り、空いているほうの手をベルトに差したピストルに伸ばした。しかし声の主は少女——大きな目に華奢なからだつきの、とても小柄な少女だった。カーラより十歳ほど年下かもしれない。少女は疲れて当惑しているみたいだった。シャツは破れ、左腕にはいかにも痛そうな長いすり傷があった。

「助けてくれませんか？ おねがいます」

カーラはゆっくりと立ち上がった。サンドイッチをナップサックにもどすと同時に、もう一丁のピストルがあるべきところにあることを確かめる。それから思いやりのこもった声でたずねた。「迷子になったの？」

「それもそうなんだけど」そういつて、少女は肩越しにちらっと振り向いてから、森の端から空き地に出てきた。「何日も外に出られなかったの。やっと出られたわ」

カーラはそのことばの意味を考えた。それから静かな声できいた。「どこにいたの？」

「うしろよ」

「なんのうしろ？」

「バスよ」もうそんなことくらいわかっているでしょうといたげに、少女はびしゃつといった。「あいつがほかの子たちといっしょに、わたしを暗いところに——」

「ほかの女の子たち？」

「そう、そうよ」小柄な少女は、自分を抱きしめるように両手をからだに巻きつけたまま、ふらっと前に出てきた。「ひどいやつよ——」

「どのセクト？」

「え？」

「そいつはセクトに属しているの？」

「チルドレン・オブ・フォーエヴァーよ」見知らぬ少女はいった。「知っている？」

カーラはナップサックを左肩に背負ったまま、右手でベルトからピストルを抜いた。森の中に動きは見られない。この世界に少女と自分以外だれも存在しないかのような静けさだった。

「あいつは妻を集めているの。出発する前に十人は集めるつもりだといっていたわ」

「こっちに来て」カーラはいった。「いまのところ女の子は何人いるの？」

少女はつばを呑んだ。「三人」

「男はひとりだけ？」

「ええ。ひとりだけ」少女の目は大きくなり、瞬きせずにきらっと光った。「女の子三人とわたし。そしてあいつ」

「どこ？」

「この先よ。駐車場の先の、大きな古いグリースツリーの木立に隠してあるの」

カーラの車も同じ方角にあった。しかしサンダーは反対方向に行ったはずだ。

カーラは声をひそめて、少女にいった。「わかったわ。助けてあげる」

「ありがとうございます！」

「静かにして」

「ごめんなさい」少女はささやいた。

「さあ」カーラはいった。「こっちよ」

少女は血で汚れた腕をさすりながらカーラのわきに近づいてきた。息づかいが荒かった。それから何度も「ありがとう」といったが、カーラの半分もうしろを振り返ろうとしなかった。だから変な感じがしたのかもしれない。

数分間ひたすら歩いてから、カーラはたずねた。「で、どうやって逃げ出したの？」

少女はうしろを振り返り、頭をうなずかせてからいった。「通風口からぬけだしたの」

これくらい小柄なら、じゅうぶん可能だろう。

「金属の縁で腕を切ってしまったわ」

傷は赤かったが、もうすでに血は凝固していた。カーラは少女の話にうなずいてみせたが、心の底ではなんとなくおかしいと感じていた。

「みつかったら、ひどい目にあうわ」

「そんなことはさせないわ」カーラはいった。

「バスの中にまだ三人の女の子がいるの」少女はいった。それからまた、自分のからだを抱くようにして両手をわきの下に入れた。「助けてあげないと。あいつがわたしを探しているあいだにバスのところに行って助けたらどうかしら」

しかしカーラはサンダーを呼びに行きたかった。少女に彼のことをいおうかと思ったが、やめておいた。兄がいることがひそかな安心になっていた。だからカーラは自信をもって少女に答えた。「あとでね。まずはあなたを助けてからよ」

少女は上目遣いにカーラを見てなにもいわなかった。

「さあ行きましょう」カーラはいった。

「助けてほしいの」

「助けようとしているのよ——」

「いいえ」そういって、少女はわきの下から両手を出した。片手にはなにもなかったが、もう片方の手には金属のフォークが二本突き出した小さな箱が握られていた。そのフォークが飛び出してきてカーラの肌に刺さったかと思うまもなく、熱くて青い稲妻がカーラのからだを走り抜けた。

少女はカーラの銃を取り上げ、ナップサックを奪い、尻ポケットから取り出したビニール紐で彼女を縛った。それから小道をくだって姿を消した。カーラは痛みがひいてきたので上体を起こし、上り坂に目を向けて兄の到着を想像した。しかしこれは兄がたどった小道ではなく、少女とニューファーマーが現れたときも、兄は姿を現わさなかった。ニューファーマーは太く短い自動小銃を肩から下げていた。四十歳か四十五歳で、大柄でたくましく、粗野な手にくさい息をした醜い男だった。「とびきりの美人だな」男は開口いちばんさういって、捕まえたばかりの獲物に微笑みかけた。それからウインクして、つけ足した。「きっと気に入るとやつに保証されたんだが、ほんとうだったな」

あの老レンジャーが仕組んだのか。

「兄らしい人はいなかったわ」少女がいった。

「それは都合がよすぎるな」男は用心するようにいった。それから武器を少女に渡し、カーラをつかんで肩にかつぎ上げた。「たいした問題じゃないだろう。どっちみちもう行くぞ。なるべく急ぐんだ」

彼らは開けた空き地に出ると、駐車場を横切ってカーラの小型車のわきを抜け、斜面を登って土着の樹木の成熟した木立に入って行った。暗がりには数台の大型バスと大型貨物トラック二台が隠されていた。トラックはバスをはさむようにとまっていた、幅広のタイヤと追加サスペンションがとりつけられていた。花嫁が三人よりずっと多いことにカーラは気づいた。最初に数えたときは十二人かと思ったが、数えなおしたら十四人いた。全員十代の少女だった。まるで校外学習にやってきた生徒みたいにくすくす笑い、いちばん新入りの妻に「年をとりすぎてひとりじゃ歩けないのね」とか「遺伝子プール

の新しい血になりそうね」とからかいの声をかけてくるのだった。

三人の若い男が黙ってカーラの到着を見守っていた。よく似ているから息子たちだろう。せいぜい二十代前半のようだ。

「美人だ」男の子たちのひとりがいった。

ほかのふたりはうなずき、にやっと笑った。

大切な荷物を扱うときのような丁寧さで、年配の男はカーラを木の根元に下ろし、彼女の背中を黒い木の幹にもたせかけ、念のために腕と脚を縛りなおした。カーラはすばやくひとりひとりの顔を見て、同情している人間を探した。だれもいなかった。おとりになった少女がいちばん陰しい顔をして、数分間、カーラのそばに立って見下ろしていた。

「兄が助けに来るわ」カーラはいった。

「たぶん来るだろう」ニューファーマーザーがいった。「だがおれはおまえたちを見張っていたんだ。おまえの兄が持っていたのは長いピストルだけだった。おれたちが持っている武器と勝負しようとは思わないだろう」

まるで自分たちの残忍な性質を証明しようとするかのように、息子たちがバスから自動小銃を持ってきた。

「つぎは？」ひとりの息子がたずねた。

「ここにいる」父親がいった。

だが長男はその戦術が気に入らなかった。「ぐるっとひとまわりして、姿を見せたら狙い撃ちしよう」

「だめだ」父親はいった。

「でも——」

「おれのいうことが聞けないのか？」

息子はうなだれた。

「神はわれわれをここに連れてきてくださった」父親はいった。「そして神はわれわれに蒸し暑い日を与えるように取り計らってください。嵐が来るように祈るんだ。わかったな。そうすれば雲に穴を開けて、出発に必要なエネルギーを手に入れることができる……」

雷のことを知っているのだ。カーラはその方法を耳にしたことがあった。嵐のときに、適当なロケットに十分な長さの針金を尾のようにとりつけて打ち上げれば、雷を誘発することができる。空気の経路が帯電した地面との結びつきを提供するのだ。雷はプリセットされた避雷針に落ちるだろう……キャンプ場の反対側の木の上に、それはあった。カーラは黒く長い金属棒から太い電線がつづいているのに気づいた。おそらくバスの中央に置かれたリッパーまでつづいているのだろう。クラスCリッパーは腹を空かせ、最初にしてたった一度の食事を待っているのだ。

これらの人々がなぜ山の中にやってきたのか、カーラにも察しがついた。人目につかない場所と安価なエネルギーが必要だったのだ。おまけに、警察はガードマンたちを殺した犯人を求めていたところを捜索していた。

サンダーはきっとすぐ近くにいるわ。カーラは自分にいきかせた。

きっとわたしを見守っているわ。

カーラはほとんど緊張をゆるめ、大きな古い木の陰で息を潜めながら相手の致命的なミスを待っている兄の姿を想像した。ちょっとしたてがかりやきっかけを待ちながら、チャンスがあればすぐに飛んでくるだろう。カーラは兄の到来の様子まで思い浮かべた。サンダーは午後になって雲が厚くなるまで待つだろう。それから雨が降り出して、小雨がしだいに土砂降りになり、信心深い男たちや少女たちが荒れ狂う空に神の姿を見ているときに、足音もなくカーラのうしろに近づいて、たちまち自由にしてくれるだろう。

そうなることはわかっていた。

カーラはその計画をととても高く評価していたので、木陰から人影があらわれたときには、ほかの連中とおなじくらいびっくりした。だれよりも小さく身をかがめた男は、足音をできるだけ立てないように裸足で走ってきた。動きは速かったが、その足どりは急いでいるようではなく、乱れもなかった。道に迷ったハイカーが人を見つけて駆け寄ってきたようだった。それがサンダーの狙いだったのかもしれない。だがその顔は陰しく集中しており、動きにはまったくむだがなかった。一瞬だれもが——花婿も花嫁もその人質さえもが——目を見張り、自分たちのまっただ中にあらわれた男をぼかんとみつめた。すると男はシャツの下に手をのばして長いピストルを取り出すと、最初のホローポイント弾で父親の頭を吹っ飛ばし、つぎの弾で小柄な少女をうち倒した。それからサンダーはまた走り出し、花嫁たちのあいだを駆け抜けた。ようやく息子たちのひとりが武器をかまえ、フルオートで乱射したので、三人の少女たちがばたばたと倒れた。もうひとりの息子が力づくで銃身を地面に向けさせ、「やめてくれ……やめるんだ……！」と叫んだ。

そのときすでに、サンダーは三人目の息子の首根っこを押さえて太い木の幹に押しつけていた。それからおびえた生き残りたちを睨みつけ、拳銃の銃身を男の股間に押しつけて、不気味なほど冷静な声でいった。「銃を捨てろ。いますぐに。さもないと、ここにお絵かきしてやるぞ……汚らしい陰毛の筆でな」

中年既婚女性らしい灰色の服は消えてなくなり、高齢の女性が好む派手な服になっていた。いま着ているのは高級で光沢のある、鮮やかな紫色のドレスとつばの広い紫色の帽子、そして幅の広い金色のベルトと揃いの靴だった。ダイエットとエクササイズのお

かげで体重が減ったので、がっちりしたからだは引き締まっていた。彼女は人生の現在の立場を——壮健でじゅうぶんに休息した未亡人という立場を——徹底的に満喫していた。戸口に立っている子どもたちの姿を見て母は微笑んだ——愛情の心からの表出は、幸福だが短かった。それから彼女は子どもたちのただならぬ様子に気づいたのだ。「どうしたの？」心配そうに彼女はたずねた。「子どもたち、なにがあったの？」

カーラは兄にちらっと目を向けてから肩越しに振り返った。

通りには簡素な営業用のバンがとまっていた。なんの変哲もない車だったが、クラスCリッパーと強力な小型ウィンチのものすごい重みのせいで後部が沈んでいた。

このバンは三日で四台目の車だった。サンダーは、必要なら明日また車を取り替えるつもりだった。

「出かけるところだったのよ」ふたりの母親はいった。けれどもだれも何もいわないので、ことばをつづけた。「ふだんはこんな格好はしないのよ——」

「行かないで」息子がいった。

「お友だちに会いに行くの？」カーラがたずねた。「もし母さんが現れなかったら、変だと思われる？」

母は首を振った。「金曜日には喫茶店に行くことにしているのよ。知り合いもいるし。でも、わたしがいなくても、だれも気にしないでしょうね」

きょうは安息日よね？

「バンを車庫に入れてもいい？」サンダーがたずねた。

母はうなずいた。「わたしの車を出さないで——」

「鍵を」

母が模造品の宝石がじゃらじゃらついたバッグから鍵を取り出すと、サンダーは玄関の階段をおりていった。

カーラはほっとして家の中に入った。居間の家具もカーペットも、少しくたびれていたけれど、むかしのままだった。驚くほどの懐かしさに囲まれたとたんに緊張が緩んだ。どうしようもなかった。立っていられなくなってすわりこみ、すぐにもものすごい眠気に呑みこまれそうになった。

「どうしたの？」母がまたたずねた。「なにがあったの？」

「なにもかも説明するわ、母さん」

「ひどい顔をしているわ。ふたりとも」年をとった母親は、でこぼこになったソファに座っていたカーラの隣にきて、彼女の膝をさすった。「でも、あなたたちふたりが一緒にいるのはうれしいわ」

そんなことばを聞いているうちに、カーラは涙が出てきた。

「話してごらんさい」

カーラはこれまでのことを一気に吐き出した。人生で二度目の誘拐に遭ったこと。彼

女を助けるときにサンダーがふたりの人間を殺してしまったこと。ふたり目の花嫁は銃の乱射で死に、ほかのふたりは重傷を負った。「でも置き去りにするしかなかったの」カーラは告白した。「花婿と花嫁たちの武器を取り上げてから、救急箱と二台のトラックを残してきたわ。わたしたちが彼らのバスで逃げる前に、サンダーはトラックのタイヤを撃ち抜いたけれど。すこしでも追っ手を遅らせるために……」

母は身じろぎもせず聞いていた。口を開けたけれど声は出てこなかった。

「その大型バスにはリッパーが載っていたの。サンダーが山の中をものすごいスピードで運転してきたわ。ぶつからなかったのが不思議くらい。修理工場に立ち寄って、サンダーがあちこちに連絡して、また数百マイル走って、それから、サンダーの友だちふたりと会ったわ……刑務所で知り合った人たちだと思う……」

「いつのことなの？」

「水曜日よ。その友だちとサンダーで、バスからリッパーを降ろしたの。彼らが新しいトラックを用意してくれて、その代わりにコンデンサやほかの金目のものを自分たちのものにしたわ。それからわたしたちは二マイルほど車を走らせて、そこでサンダーは二台目のトラックを盗んだの。彼は友だちを信用していなかったのね。彼らがリッパーを奪うために追いかけてくるかもしれないって」カーラは目と頬をぬぐった。「それから千マイル以上も走ってきたけれど、たえず進路を変えてきたわ。そのときまでにこれからどうするか決心がついて、ここに来る前にサンダーがあこのバンを盗んだの」

母は注意深く集中して聞いていた。前かがみになって娘の膝に載せた手に力をこめた。とても静かな声で、彼女はたずねた。「あのコンボイから盗まれたリッパーの一台なのね？」

カーラはうなずいた。「IDマークが一致したわ」

「正当な持ち主に返そうとは思わなかったの？」

「ええ、そのことも話し合ったわ」

そのとき母はようやく、カーラにとってはわかりきったことに思い当たったようだった。「持ち主にどんな説明をしても、彼らはサンダーが強盗殺人に関わりがあると思うでしょうね。そんなまねをしても無意味だわ」

「そうね」

母はカーラの両手を握って、何のためらいもなくいった。「神さまがあなたたちに贈り物をくださったのよ」

カーラは今回のことを宗教的に考えたことはなかった。でもそのことばはうれしかった。

「すばらしく、たぐいまれな贈り物を。もしだれか新世界を受け継ぐ資格があるものがあるとするば、それは――」

「兄さん？」

「いいえ」母は心から驚いたように叫んだ。サンダーが玄関扉を開けて入ってきたが、母は晴れやかにいった。「あなたよ、カーラ。あなたには最良の世界がふさわしいのよ。そうよ、そうよ、そうよ……！」

慌ただしい日々がはじまった。チルドレン・オブ・フォーエヴァーは、老レンジャーにきくか、彼女が乗り捨てた車を調べるかして、もう彼らの名前をつきとめているだろう。リッパーを盗むのに数十人を殺したやつらだから、自分たちのものを取りもどして仲間の仇を討つためなら、どんなことでもするだろう。今度は母親も連れて姿を消す必要があった。古い生活といままで習慣は捨てなければならない。しかし逃亡中でも、つぎにどうするべきか計画する時間とエネルギーをみつけないならなかった。

サンダーは、機械や食料など必要な物資を手に入れるのにいちばんいいところを知っていた。いっぽうカーラは人びとを、この計画を価値あるものにするのにふさわしい人びとを知っていた。そしてふたりの仲立ちをしたのが母だった。頑固なふたりが、翌日には些事に思えるようなつまらないことをめぐって口論をはじめると、母が仲裁に入るのだった。

あつというまに冬が来た——別の世界に移住するには最悪の季節である。だがそのおかげで、すべての準備を完璧か、それに近い状態にする数か月のゆとりが生まれた。

もう何年も前に、かつて彼らの車を直してくれた老修理工は引退し、修理工場兼ガソリンスタンドのつぎの所有者は倒産に追い込まれた。その店を銀行からただ同然で購入し、ふたたび電気をひいた。それからカーラの友人たちに労働力と資金を提供してもらって、サンダーは彼らの特殊な目的のために建物を改装した。医薬品の備蓄は婦人部屋に鍵をかけて保管された。車庫には缶詰、乾燥食品、巨大な水タンクとその他の必要物資がいっぱいに積み上げられた。そのなかには、このちいさな建物を運び去ってくれる、充電済みのクラスCリッパーもふくまれていた。

三月の終わりの厳しい寒さが残るある日——出発予定日まであと数週間だった——見知らぬ男がガソリンを買いにきた。男は使い物にならないポンプの横に車をとめて、何度かクラクションを鳴らした。それから、特徴のない小さな車から降りてきて、シャッターがおりた窓にかかる閉店の看板を無視して、ひび割れた舗装を横切り、車庫のふたつのドアと正面玄関の両方を激しくノックした。

「おい！ だれかいのか？」そう叫んでから、男はようやくあきらめた。

男が車にもどっていくと、カーラは兄にたずねた。「あいつは何者？ チルドレン・オブ・フォーエヴァー、それとも私服警官？」

「実際、どうでもいいことじゃないか？」

カーラはスプラッター銃を台座にもどした。

「そろそろ潮時だと思うわ」母がいった。

理想にはまだ早い季節だった。しかし選択の余地はなかった。カーラは受話器をつかみ、いちばん近い町に暗号化した電話をかけた。一時間以内に全員が到着した。いっしょに行かない者たちは涙ぐみ、行く者たちに手短かに別れのことばを告げて、祝福された開拓者たちにキスと抱擁を浴びせた。しかし開拓者たちはもうたくさんになって、恥ずかしそうな声でこういった。「もういいよ、ママ、パパ。もうじゅうぶんだよ。さようなら！」

カーラはこれまで経験してきたことや支払ってきた代償のことを思うと、これから起きることをどうしても自分の目で見届けたかった。彼女は待合室のシャッターを残らず開け放って灰色の霧を入れた。それから六歳の子どもたちふたりのあいだにすわった。するとそのひとりがたずねた。「あとどれくらい？」

「もうすぐよ」カーラはいった。「せいぜいあと一、二分」

サンダーと機械に詳しい人たち数人は車庫にいて、リッパーの電源が入るのを見守っていた。待合室にはカーラのほかに、大人の男性が五人、女性が十二人、そして四十人近くの子どもたちが折りたたみ椅子にすわっていた。最年長の子どもは十二歳の負けん気の強い少年で——あとに残る同僚のひとり息子だった。

女性のひとはカーラの母で、彼女が最年長というわけでもなかった。

「ほかのすべての人たちの間違いをくり返すつもりはないの」数か月前、古い家の居間で、カーラは母に説明した。「祖父母や幼い子どもたちも連れていくけれど、若者はほとんど連れていかないつもり。男らしさも愚かさもないわ。いるのは知恵と若さなの」

「どんな種を持っていくの？」母がたずねた。

「なにも」

「なにもって？——」

「種も動物も持っていかないわ。生きたカメの甲羅ひとつもね。そして出発する前に、建物の中のネズミと、それにハエもノミも全部駆除するつもりよ。もし地面の中にミミズがいても、新しい世界で顔を出したら、すぐに殺すわ」

この世界を出て行くのは人間だけ。

そしてそのときでさえ、持っていくものは極力少なくするつもりだった。道具や、科学と機械に関する本は何冊か持っていく。しかし聖書やおかしな聖典のたぐいは一切持っていないこと、そしてできるかぎり、偏見やくだらない宗教のにおいのするものはすべて滅びゆく世界に置いていくことを、すでに全員が誓っていた。

子どもたちはみな、カーラと同じ信念をもつ人びとの子どもたちだった。

自分と同じように考える人びとがこんなにいることは驚きでもあり、心温まることでもあった。ときどき、ひどく自信を失ったときなど、この世界にもあと一万年は生き延

びる可能性があるのではないかと思うこともあった。

しかし——経済的、政治的、あるいは宗教的な破滅によって——世界の終わりが近いと考えている親がたくさんいて、だからこそ彼らは幼い息子や娘を新世界に送り出したいと心から願っていたのだった。

彼らはいまハイウェイの近くに立って、リッパーが現実を激しく打ちはじめると、その音を聞いているはずだった。

寒い車庫の中から、サンダーの叫び声が聞こえてきた。「目的地がみつかったぞ！」

この狂気の沙汰はうまくいくだろうか？ カーラは最後にもう一度自問した。はたしてひとつの種が、子どもと老人たちをうしろに従えて異世界にたどりつき、生存できるだけの食べ物をみつけることができるだろうか？ それから先の何万年間を、その世界のものをなにひとつ破壊することなく生き延びて……？

もう問いかけるには手遅れだった。

ある日の雲が消え去って、いきなり雲ひとつない青空の輝きと、青緑色の草原のようなものが無限の彼方まで広がっているのが見えた……そして室内はふいに、子どもたちの楽しそうな叫び声に満ちあふれた。「すてき！　すごい！　きれい！」

カーラの右にすわっていた男の子が彼女の腕をひっぱっていった。「おもしろかったね、ミス・カーラ。もう一度やろうよ！」

了